

承女救済セイヴァーズ

B・R

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界には、神秘が損なわれ、科学が蔓延していた。人間は、科学で以て神秘に打ち勝ったのである。

しかし、人々は神に頼らず己の足で地面を歩くことの困難さを理解しきれていなかった。

唐突に現れた、様々な姿形をした未知の神秘存在『アンノウン』により、世界は未曾有の混乱に陥る??はずであった。

しかし、その予想は外れ、一時話題となったアンノウンは、その一ヶ月後には地震程度の災害という認識に収まっていた。

これは、その立役者である少女達の物語。

アンノウンの出現から三年後、一人の少女が聖剣を握るところから、この物語は始まる。

伝承の力で以て、悪しき伝説を打ち破る。人は彼女らを、アンノウンからの救済者『セイヴァーズ』と呼んだ。

目次

承女救済セイヴアーズ『My power is for to save』

第一話	出逢い	1
第二話	覚醒	10
第三話	Way Mark	19
第四話	翌日	27
第五話	力量	34
第六話	影	43
第七話	父	51
第八話	憤り	60
第九話	ゴルゴーン戦	69
第十話	呵責	78
第十一話	悩み	87
第十二話	十村アオイという少女	95
第十三話	急展	105
第十四話	対峙する。	113

承女救済セイヴアーズ『My power is f
or to save』

第一話 出逢い

桜が舞う。

学生達は、新たな世界に期待を持ち、もう既にその世界の住人である在校生達は、新しい学年に上がることに緊張する季節。

そして、そんな学生達が門を潜る、モダンな雰囲気のコンクリート造りのこの私立義浦中学校も、例外なく彼ら彼女らを迎え入れていた。

そんな学生達の中に、少女は居た。

ボブカットにした黒髪を揺らしながら、舞い散る桜を水色、空色の眼で見つめる。まだ慣れぬブレザーに袖を通した新入生の少女の名前は、おもいがたり想語コウ。

この私立義浦中学校に通い始めた新一年生である。

「??僕も、中学生か」

感慨深げに零した彼女の姿は、落ち着いていて、一か月前まで小学校最高学年であった少女とは思えない。しかし、その瞳には、何かへの熱意が宿っているのは確か。そして、新しい生活への期待を胸に宿しているのも確かである。

そんなともすれば黄昏れる彼女に、人影が後ろから飛び付いた。

「コウウっ！」

「ひゃっ!? ??って、なんだ。ミキか」

コウの返しに、後ろから飛び付いた茶髪の快活そうな少女、栗林くりばやしミキは頬を膨らませる。

「なんだとはなんだ。なんだとは〜！」

「ふふふ」

「ごめんごめん。リオもおはよう」

頬を膨らませるミキに笑みを零した黒髪の冷静そうな少女、三橋みつはしリ

才に、コウは手を振って挨拶する。

彼女達三人は、幼稚園、小学校と同じ所に通った、言わば幼馴染というやつである。

二人の姿に、コウは堪らず笑みを零した。

その笑みに、ミキとリオの二人は疑問符を浮かべる。

「いや、小学校と変わらないなって」

「まーねー」

「それは、確かに。でも、人ってそう簡単に変わらないもの、でしょ？」

「それもそうか」

納得した様子のコウを見て、リオはまた「ふふふ」と笑った。それに釣られて、ミキも笑い、コウも笑う。

下駄箱を過ぎ、教室まで続く廊下で、ミキは二人に提案した。

「ねね、後でカラオケ行かない？」

「うーん??良いよ。特に予定もなかったはずだし」

「私も大丈夫」

「じゃ、決まり！ 今から、楽しみだなあ！」

まだ、入学式も終わっていないと言うのに、楽しそうにするミキを見て、コウとリオは顔を見合わせて苦笑した。

◇

そして、入学式も終わった帰り道。

少女達は、小学生時代からよく行くカラオケ屋に向かって、商店街を歩いていった。

「にしても、校長の話長かったよねえ」

「確かに、僕もそう思うよ」

「小学校の時と、言ってることほとんど一緒だしね」

入学式の長さに不満を零すのは、年相応の少女らしいと言える。

取り留めもない話が、少女達の間で続く。それは、ニユースの話であつたり、バラエティ番組の話であつたり、身内の話であつたりと、様々だが、少女達からすれば、それくらいがちょうど良いのだ。

そんな時である。

彼女らの耳に、唐突にサイレンの音が届いた。

『WayMarkよりアンノウン警報を発令します。付近の市民の皆様は、至急、シエルタワーまで非難ください。繰り返します』

平々凡々の、やや活気づいた午後の商店街に、けたたましくサイレンの音と警報が鳴り響く。

商店街の人間達は、その警報に弾かれるかのように駆け足でシエルタワーのある方角に向かっていく。

そんな、見慣れた光景に、三人組の少女は予定がキャンセルされたことに溜息を吐いた。

ミキは、辺りを一瞥しながら、隣を歩くコウに話しかける。

「だってさ、コウ。入学式終わりだってのに、タイミング最低だよ。カラオケ行けなくなっちゃったけど、どうする?」

「そりゃ、避難するよ。僕だって、死にたくないし。だけど?」

コウの言い淀む姿に、「やっぱり」と言っただけでリオはゆっくりとコウの方を向いた。その顔には、心配の色が見える。

「まあ、私達は先に避難してるから、コウもさっさと避難しなよ?」

「てことで、見回りガンバー!」

「ありがとう、ミキ、リオ。じゃ、また後で!」

そう言っただけで、シエルタワーの方に歩き出した二人に手を振って、コウは避難する市民の波に逆らうように走り出した。

目指すは、三年前より全世界に突如として現れた特殊指定災害『アンノウン』、その発生地点と思われる方角。いや、正確には逃げ遅れた可能性のある人々がいる方角である。

◇

まだアンノウンによる破壊を免れている住宅街。

コウは、注意深く辺りを見回しながら、誰かが逃げ遅れていないかを確認し続ける。

これは、彼女の生来の性格であり、彼女自身、どうしようもないほどに人助けを優先してしまう。

それを、彼女は悪いことだと思っただけでいいし、正しいことだとす

ら思っている。だが、彼女を心配してくれている人間が、少なくとも家族と友人二人がいることは事実で、それが、彼女の自己犠牲の精神に歯止めを掛けていた。

「??いない、みたいだね。じゃあ、僕も??」

そうして、いつも通り、見回りを終えて、自分もシエルターまで避難しようとしたその時である。

コウの耳は、誰かの助けを求める声を、聴く聞き取った。

「どこだ！ どこにいるんだい!?!」

その声の聞こえた方、飛来した市営バスによつて廃墟と化した一つの家へと、コウは駆け込んだ。

そして、頭から血を流し気絶している母親と思しき女性と、その傍で泣きじやくる一人の幼い少女を見つける。

「君、大丈夫かい!?!」

「お姉ちゃん??お母さんが??お母さんがああ!?!」

今の少女では、真面に会話も出来ないだろうことを理解し、コウは少女の母親の様子を確認する。

「??酷いな。早くしないと、間に合わない?！」

コウは、同年代の中でも恵まれた体格に感謝して、よろけながらも女性を背に負う。そして、未だ泣き止まぬ少女の手を掴んで、その場からシエルターの方まで歩き出した。

数十メートル進んだ所で、少女の様子を確認すれば、未だ混乱はしているものの、幾分か冷静さを取り戻しつつあった。その姿に、コウは安堵のため息を漏らす。

体力は人並み以上にはある自負があったが、人を背負っている状況ではそれも誤差でしかなく。コウは、息も絶え絶えに進み始める。

その時、少し汚れたコウの制服の裾を少女が引っ張った。

「ねえ、お姉ちゃん」

「なんだい?！」

「なんで、助けに来てくれたの?！」

少女のその質問に、コウはすぐには答えられなかった。

いや、答えならばある。だが、それが万人に受け入れられるもので

は無いことも、今までの経験から理解していたのだ。

しかし、少女はそれを聞くまででても動きそうにない。渋々、コウは質問に答えることにした。

「僕はね。誰かを救えるような人間になりたいんだ」

「誰かって、誰でも?」

「そう。誰でも。悪人であれ、善人であれ、僕は僕の手の平で救える命を救いたい。??ごめんね、ちょっと難しい話だったよね」

コウの言葉に、最初は理解が及ばないと言った顔をしていた少女であつたが、不安そうにするコウを見て、笑顔を見せた。

「ううん! お姉ちゃんのお陰で、わたしもお母さんも助かったの!

だから、お姉ちゃんは良い人だよ!」

「??ありがとう」

「どういたしまして」、そう言つて歩き出した少女を見て、コウは何か温かいものを感じた。

そうして、歩き出そうとした時である。

コウは、遠くからこちらに迫る何かの音、ザワつく胸の音を聞き付ける。

「??ッ! 危ないっ!!」

「え?」

咄嗟の判断であつたが、それは幸をそうした。

母親を傷付けないようにしながら、少女を庇い、空から落ちてきた電柱を避ける。

住宅街のコンクリートを削り飛ばし、電柱は少女達の真隣に着地する。

コウは、少女の母親を下ろし、少女に安否を尋ねる。

「大丈夫? 怪我はない?」

「う、うん。ありがと、お姉ちゃ??お姉ちゃん! 後ろ!」

「え?」

コウが後ろを向いた時、そこには空を羽ばたく黒いシルエツト、巨

大な龍を象ったナニカがコウ達の方を見つめていた。

「??アン、ノウン??」

「どうしよう??お姉ちゃん、どうするの!?!」

混乱する少女を他所に、初めて見るアンノウンの姿に、コウは困惑を隠せなかった。

そんなコウの姿を知ってか知らずか、少女はコウの腕を引っ張る。

「??どうすれば?!」

それに我に帰るものの、この窮地を脱することの出来る冴えた方法があるわけでもない。

万事休す。こちらへと火炎迸る開いた口腔を向けるアンノウン。それを見つめ、何故か冷静な思考で、コウはそんな漠然としたことを考えていた。

「??まだ、終われない。まだ、助けていないぞ! 僕は!!」

叫ぶ。想いのままに。

彼女にとって、誰かを救うことこそ、彼女の渴きを満たすものであり、全ては自己満足のため。だが、偽善であろうと彼女の救いたいという一途な想いは本物であると、そう自負している。

だが、アンノウンに慈悲はない。彼女のような偽善にして無償の慈悲すらも、存在しはしない。

「——なら、私はその想いを引き継ぐ」

否、救世者セイヴァーズにこそ、慈悲はあった。

アンノウンとコウ達との間に立ち塞がったその飛翔する人影は、空のように澄んだ色をした鎧を身体に装着した少女。右手には、赤いラインの入った金色の西洋剣を持ち、アンノウンへと逸らすことなく向けている。

いつか小説で読んだ、鳥の濡れ羽色をした髪というのはこれを言うんだろう。

どうしてか、そんなことを考えていた。

それ程までに、長い黒髪を振り払い、アンノウンを睨み付けるその姿は、美しかった。

「??行くぞ、『ヴォーティガン』！今日こそ、お前を殲滅する！」

『G a a A a a !!』

コウ達へと向けて放とうとしていた火炎を、『ヴォーティガン』と呼ばれた巨龍型アンノウンは、現れた少女へと解き放った。

少女は、それを一瞥し手に持った剣を掲げ、一閃する。

「うああー！」

それは、焰を切り裂き、風を巻き起こす。風は、気を裂き、ヴォーティガンの体勢を崩す程。

ヴォーティガンは、ならばとばかりにもう一度火炎を吐き出す。それすらも意に介さず、少女は黄金の剣で斬り捨てた。

さながら、夢物語、神話を見ているかのような突拍子もない体験。

コウは、知らず知らずの内に言葉を漏らしていた。

「凄い??」

『G A a a a !!』

大気が揺れる。今度は、先程までの、火炎とは威力が違うと、素人目にも簡単に分かった。

そして、それを迎え撃つ少女も、先程までとは違った動きをする。

彼女が黄金の剣を振り払うと、ソレは、刀身を先から二つに分ける。

そして、彼女は柄を両手で握りこんだ。

『G u A a a !!』

『『エクス??ツバースト』オ!!!』

ヴォーティガンから放たれた巨大な火球と、突き出された黄金の剣から放たれた赤い閃光が、衝突する。

住宅街のありとあらゆるものを吹き飛ばしながら、それは拮抗する。しかし、コウの眼には焰が幾分か優勢なように見えた。

「く??うッ!」

『G A A A A A A A A A!!!!』

少女の整った顔が苦悶に歪む。

それと同時に、彼女の身体に纏われている鎧に、小さくないヒビが入る。

それを理解しているのであろう少女の顔に、焦りが見えた。

そして??

『G Y Y A a a a a a!!』

「うあああ!!!」

パキツという小さな音が辺りに響く。それを皮切りにして、少女の鎧にヒビが入っていく。

それは、とうとう少女の鎧を破砕させるに至った。鎧が砕け散り、糸が切れたかのように脱力して空から落ちる少女を光が包む。

光が晴れたそこには、学生服に身を包む少女の姿があった。

先程の鎧姿であれば兎も角、今のあの姿では地面に叩きつけられれば間違いなく死んでしまう。

それを一瞬の内に理解したコウは、一も二もなく駆け出していた。

「間にッ合えええ!!」

その努力は、間に合った。

体勢を崩しながらも、コウは両手で少女をしっかりと受け止めた。

足と腕に鈍い痛みが走るが、それよりも彼女を救うことが出来たことに安堵する。

だが、そんな努力と成果を嘲笑うように、ヴォーテイガンはもう一度口腔を開いた。

今度こそ終わり。

轟音と共に解き放たれた焰を眺め、そんな言葉が脳裏を過った時、少女の着けていた銀の指輪にコウの手が触れ――

「Half Excalibur Start—up??！」

コウは空色の眼を見開き、唐突に頭に浮かび上がった^{詠唱}言葉を、咄嗟に唱えた。

第二話 覚醒

「Half Excalibur Start-up!!」

コウが、その言葉を叫んだ瞬間、彼女の身体を光が包み込む。眩さに目を瞑る。そして、ゆっくりと開いた時、

「??これは??」

コウの身体を、先程、少女が纏っていたものと同じ空色の鎧が包んでいた。だが、胸元と、両肩、両足の膝下に装着されたそれは、少女の纏っていたそれよりも幾分か輝きを増しているように思える。

そして、その右手には黄金の剣が握られていた。

コウに抱かれていた少女は、驚きに目を見開いてコウを見つめていた。

「貴女も、適合者なのか??」

「??適合者?」

その言葉に首を傾げるコウ。少女は、説明しようとして、そんな時間などくれるはずもないヴォーテイガンの姿に、コウへと要件を伝える。

「貴女には、後で付き合ってもらおう。けど今は、その力、セイヴァーギア、エクスカリバーで世界を救ってくれ!!」

「??ッ!!」

その力で、世界を救う。

その言葉は、驚く程にあっさりと、コウの中に収まった。

「??分かった。僕が、この世界を救う??」

そうして、コウは少女を地面にゆっくりと寝かせて、後ろで気絶してしまっている幼い少女と女性を一瞥する。

救いたいと、想ったのだ。だから、救う。それだけのこと。世界を救うとまで言ったのだから、当たり前だろう。

黄金の剣『エクスカリバー』を両手で構えた。

「アンノウン!! これから先は、僕が相手をしよう!」

『G A A A!』

その言葉に、応えるかのように、ヴォーティガンは火の混じる吐息を吐いた。

それだけで、こちらにも熱が伝わってくる。

はつきり言って、怖い。そんなことを、コウは考える。

いつもは物怖じせず、誰かを救う為に動ける人間、それが想語コウという少女であったが、今回ばかりはそういうわけでもないらしい。

笑うかのようにガクガクと震える膝に力を込めて、割れたアスファルトの大地を踏み締める。

「??:行くぞー!」

少女は、エクスカリバーを片手にアスファルトを踏み砕きながら、走り出した。

ヴォーティガンは大振りに腕を振るうことで、愚かな救世者見習いを潰そうとする。

それを、胸のざわつきによって間一髪のところまで横に飛び退くことで回避。すかさず、腕にエクスカリバーを突き立てる。

『G Y y y y y!』

「まだッだア!! 『エクス・バースト』オ!!」

そして、突き立てた状態で、無理やりエクスカリバーを開き、赤い閃光を解き放つ。

その閃光は、爆煙を生み出し、煙が晴れたそこには??:

『G Y A A A A a a a a!?:』

「片手はもらった??:!」

半ばから吹き飛んだヴォーティガンの右腕と、輝きを損なわぬ聖剣の姿があった。

苦悶の声を上げるヴォーティガンを他所に、コウはまた走り出す。留まれば、怒り狂うヴォーティガンの凶刃と炎は己を死に至らしめる

と、彼女は理解していた。

「次は、その翼をもらおう!!」

『G A A A A A A A A A!!』

ヴォーティガンは、今度は空に飛翔し、住宅街に存在するものを吹き飛ばしながら、距離を取ろうとする。住宅街の屋根の上に飛び上がったコウは、そうはさせまいと、もう一度エクスカリバーを展開しようとする。だが、それは飛来する数個の火球によって中断されてしまった。

「空を飛ぶのは、ずるくないかい？」

『G A A A Y A A A A A!!』

そんなことは知らない、ヴォーティガンはさらに距離をとり、火球を撃ち出し続ける。

「??撃ち落とす?? 『エクス・バースト』!!」

自らに当たる火球を、エクス・バーストによる閃光で撃ち落とし、着々と距離を詰めていく。

だが、ヴォーティガンは、その程度で倒せるような生温いアンノウンではなかった。

『A A A A A A!!』

「なっ!?!」

コウの表情が、驚愕に歪む。

その火球に混じっていた威力の高い爆炎が、コウを襲った。

直撃を受け、コウの鎧に、先程の少女の時と同じようなヒビが入る。

そして、ヴォーティガンにより薙ぎ払われた尾による追撃によって、コウの意識は途絶えた。

◇

次にコウが目を覚めたのは、先程まで戦っていた廃墟と化しつつあった住宅街とは掛け離れた空間。

花卉が舞い、光が溢れ、温かな風が頬を撫ぜる。まるで、幻想の世界。

「??ここは?」

誰に問うわけでもなく、口をついて出た言葉。

しかし、この空間には、それに答える存在がいた。

『我がエクスカリバーの担い手よ。ここは、救世者の夢想世界である』
「!? 誰だ!?!」

その声は、コウの質問にしばらく逡巡した様子を見せる。

『私はアーサー・ペンドラゴン。エクスカリバーの初代担い手であり、今、想語コウと共にある存在である』

「アーサー・ペンドラゴン??僕と共に?」

『うむ。よもや、一時間足らずでここまで来るとは思わなかったが、な』

その言葉には、呆れとも取れる感情が込められていた。

『だが、其方と相對することで理解した。其方には、元よりエクスカリバーの源物Originの片割れが宿っていたと、そういうことなのだな』

「エクスカリバーの、源物?」

『次に目が覚めた時、其方は得ることができよう。叫ぶのだ、その想いのままに』

「ま??つ!?!」

「待ってくれ」、そう言おうとして引っ張られるような感覚に襲われる。

少女は、そこで、もう一度意識を手放した。

◇

「??いい! おき!?!」

誰かが、己を呼ぶ。だが、それよりも強くナニカが己の脳に叫ぶのだ。

薄く覚醒した意識で、その言葉を聞き取った。もう、この言葉は、忘れない。

「うう??ん」

「起きたんだな！ 逃げるぞ！ そろそろ、他のセイヴァーズが増援に来る！ あの二人も助かるだろう。貴女はよく頑張った！」

早口に捲し立てられて、コウは混乱する。辺りを見回せば、半分ほど挟れた住居の中に寝かされていることを理解出来た。

何となく逃げようとしていることを理解し、立ち上がる。

だから、それは、できない。

「??僕は、まだ、やれます??！」

「無理だ！セイヴァーギアだって、機能停止して??嘘っ!!」

彼女が、コウの手のひらの中にあつた指輪を見て驚きを示す。

最初は空色であつた指輪のラインが、虹色に輝いていた。

それは、コウにも今の少女にも理解できないことであつたが、指輪、セイヴァーギアに、セイヴァーギアの源であるレジエンダリーエナジーが漲っている証拠であつた。

これなら、やれる。

漠然とした直感を胸に、コウは、小さく頷くと徐に立ち上がる。

そして、指輪を握り締めて、握り締めた拳を上突き出した。

唱えるは、あの瞬間、脳に焼き付いた忘れ得ぬ言葉。完全を意味する、力強い詠唱。

「——P e r f e c t E x c a l i b u r S t a r t — u p
!!」

最初の光とは比にならないほどの眩い光が彼女を包む。

今度は、安心して身を任せられた。

「その姿は??！」

少女の身体を、空色の軽装甲が覆い、その上から先程まではなかつ

た赤い外套が出現する。そして、エクスカリバーの黄金の刀身は、白で紋様が刻まれ、赤いラインはさらに鮮やかに光る。

その姿は、正しくエクスカリバーを担う聖なる騎士。

「そう。貴女は、私よりもエクスカリバーを担うに相応しいと。そういうことなのだな」

「??」

少女は落胆が隠せない様子であった。何かを言おうとして、言い淀むコウ。しかし、少女は俯かせた顔を、再度コウに向けてキツパリと言いつ放つ。

「セイヴァーギアを、エクスカリバーを引き継いだのだから、貴女は当然、世界を救うのだろうか？　じゃないと、私が馬鹿みたいではないか」

自嘲げに、そう言うその姿には未練などなかった。

ただ、コウからの嘘偽りない答えを求める意思だけがあった。

ならば、その問いは、愚問であるとしか言い様が無いだろう。

何せ、この少女は、世界などという突拍子もない言葉が飛び交おう

と――

「もちろん。貴女に代わって、僕が世界を救ってみせる」

――二つ返事で了承するような、善行バカなのだから。

彼女と出会ってからの時間はあまり多くないが、それでも、少女はコウがそういう人間であると薄々理解出来ていた。

「私は、宮野リンゼ。貴女は？」

「僕は、想語コウ」

二人は、握手を交わす。

それは、友誼ではなく、誓いのソレ。自らの為ではなく、世界の為に、約束を違えることは、許されない。

そうして、コウは未だに住宅街を破壊しながら、シエルターの方角へと進むヴォーティガンへと向き直り、そちらへと先程よりも速く駆け抜ける。

「待てツヴオーティガン!! 僕は、ここにいるッ!!」

『??G A a? G A A A A a A A A a!!!』

少女の叫びに、ヴオーティガンは怪訝そうに向き直り、そして、己の右腕を奪った怨敵の姿を視界に収めた。

『G A A A!!』

「斬ッ!!」

咆哮と共に撃ち放たれた挨拶がわりの火球を、事も無げに両断してみせる。

「貫け!」

その一言と共に、少女の背ではためく外套が、まるで意志を持ったかのように蠢き、槍のように先を尖らせヴオーティガンへと襲い掛かる。

先程まで無かったものだが、使い方が手に取るようにわかった。

『G A A A A G U U!?!』

それは、ヴオーティガンの左翼の付け根を貫き、ヴオーティガンを墜落させるに至る。飛ぶことが出来なくなった邪龍は、商店街の建物に激突しもがき苦しんだ。

そして、怯み動けないヴオーティガンへと加速度的に肉薄。飛びかかりざまにエクスカリバーを一閃し、左腕を斬り飛ばす。

「はあっ!!」

『g A a!?!』

急ブレーキすることで、コンクリートを削りながら止まり、もう一度斬り掛かる。

ヴオーティガンも、やられるだけではないと、口腔から焰を覗かせるが、それを無視してさらに距離を詰め、残る右翼を斬り捨てた。

「これで、後は首だけ、だね」

『G A A A A A A A A A A A!!!』

ヴォーティガンは、荒れ狂い怒りのままにいくつもの火球と、火炎の吐息を吐き出す。

それは、前の少女とエクスカリバーでは、為す術もなく殺されていただろう。

——だが、今の彼女は違う。

外套が形を変えて、火球を斬り裂き、その手に持ったエクスカリバーで火炎を両断する。

そして、全ての火球を斬り捨てた外套が、今度はヴォーティガンの首に巻き付き邪龍を拘束した。

ヴォーティガンの名を持つ、エクスカリバーと浅からぬ縁を持つ邪龍は、英雄の如く全てを乗り越え、今まさに己を殺そうとするその姿に誰かを見て——

「——『カリバア??ストラアイク』 ツ!!!」

頭から両断され、爆発四散した。

◇

ボロボロになった商店街へと降り立つ。

すると、再三、コウを光が包み込み、セイヴァーギアの装着が解除される。レジエンダリーエナジーの供給が、戦意の消失により終了したのだ。

今日何度目かの安堵のため息を漏らした。

「??ふう??」

「あっさり倒してくれる??まあ、史上初のパーフェクトセイヴァーギアの装着者なのだからな。これくらいしてくれなくては、困るという

もの」

どっと、コウの身体を疲れが包み込む。瞼が重く、今にも、眠気に身を任せてしまいそうだ。外からの情報を次々に遮断し始めた脳を、なんとか踏みとどまらせて、リンゼの言葉に耳を傾ける。

「??何はともあれ、感謝する。コウ、ありがとう」

「??う、ん??」

だが、その言葉だけは鮮明にコウの耳に届いた。

コウは、温かな気持ちに包まれ、そして、温かさで意識を失った。

第三話 Way Mark

綺麗に整頓された、白を基調とした医務室らしき一室。

そこで、コウは目を覚ました。

「うう??ん??」

まず目に入ったのは、自分に繋がる管と吊るされたパツク。何やら、心拍数などを測るような機械。

そして、己の上、布団に突っ伏して眠る黒髪の少女、宮野リンゼの姿であった。

「??」

改めて見ると、綺麗な人だ。

そんなことを考えていたからか、コウは、絹糸のような黒髪を撫ぜていた。

そして、何となく愛おしさを感じ、顔をちらりと見て、綺麗な黒い眼と目が合った。

「??何をしているんだ?」

「??っ!? ??ごめんなさい」

本当に何をしているんだ、自分は。コウは、明らかにおかしかった自分を恥じて、謝罪する。

別に怒っているわけでもなかったリンゼは、その謝罪を受け取り、ゆっくりと立ち上がった。

「係の人を呼んでくる。少し待っていてくれ」

「??はい」

リンゼの後ろ姿を見送る。

律儀に失礼したと言って一礼して出て行く姿は、彼女の人柄を如実に表していた。

「~~~~ッ!」

そして、顔が湯立ったかのように熱くなるのを感じて、コウは一人悶えるのであった。

◇

「はい。これで検診、終わりですよ」

リンゼが呼んできた優しげな雰囲気の係の女性は、触診と検血を行い、いくつかの問いを投げ掛けた。そのどれもが、健康診断などで問われるようなあたりざわりのないものであったが、自分が普通とは何らかの違いがあるということは、コウにも分かった。

「それでは、着いてきてくれ」

「はい」

畳まれていた制服に着替え、コウはリンゼについて行く。

医務室を出れば、そこにはアニメや映画の秘密基地もかくやといった近未来的な通路が広がっていた。

通路を歩きながら、コウはリンゼに質問する。

「あの、エクスカリバー??って今どこにあるんですか?」

「??」 ああ、そうか。知らないんだったな。エクスカリバーは、今、コウの右手にあるだろう?」

「え?」

そう言つて、己の右手に視線を落とすと、人差し指に銀色に輝く指輪が確認できた。

先のような虹色に輝いてこそいかなかったが、力強さを感じることが出来る。あの時の言葉を唱えれば、またあの姿になれるという確信も、あった。

「??それと、敬語は無しで良い。他がどうかは知らないが、うちは、そういうのを気にする人間は多分、いない」

「??分かった」

「それで良い」、そう言つてリンゼはまた黙つて歩き出してしまふ。あまり、喋らない人なのかな。それなら、話しかけるのも迷惑かもしれない。一人重い空気に纏われながら、少女は後に続いた。

その時、まるで彼女に助け舟を出すかのごとく、一人の少女が現れる。

「お、リンゼじゃねえか。つてーと、そつちが新入りかあ?」

「そうだ」

白いストールを巻いた焦げ茶色の髪の毛の少女は、青い瞳を快活そうに和らげて、コウに手を差し出す。

「オレは、才原レンカ。お前は?。」

「僕は、想語コウ?と言います」

コウがその手を握ると、レンカと名乗った少女は、強く握り返す。??力強い人だなあ?。コウは、そんなことを考えながら、痛くなり始めた右手から意識を逸らす。

「敬語は良いって。タメ口で良いよ。どうせそんな歳離れてねえんだろ?オレは17だけど、お前、いくつ?。」

「??13」

「は?。」

多分、13歳にしては身長が高い164cmもあるから、驚いているんだろう。恐らく、1cmくらい向こうが高いと思うが。衝撃を受けたようなレンカの様子に、当たりをつけて、コウは苦笑した。

「ま、まあ、タメ口で良いさ。よろしくな」

「??よろしく」

最初よりも微妙になってしまった空気に居た堪れなくなる。誰が悪いというわけでもないのだが、みんな律儀であった。

沈黙した空気を務めて無視して、三人は通路を早歩きで歩いた。

◇

横開きに扉が開く。

ここも近未来的だな。漠然としたことしか考えていないが、それくらいに、普通の中にいた少女にとって、インパクトが強かったのだ。

「??ここが、私達セイヴァーズの所属する、国家特務機関『Waymark』の司令室だ」

「??へえ?」

少女達が辿り着いたのは、忙しく画面に映し出される映像が変動しているモニターがいくつも張られ、機材の設置された机に人が座って何かの作業をしている一室。正しく秘密基地と言った様相である。

コウは、初めて実物を見たからか、柄に無く驚きを隠せないでいた。視線をあちらこちらに行き来させ、未知を噛み締める。その姿は、年相応の少年少女の様である。

すると、段差の上、椅子に座っていた歴戦の司令官の様な雰囲気、

黒いビジネススーツに袖を通した茶髪の男性が立ち上がり、両腕を広げた。

『Way Mark』によろこそ、想語コウ少女！ 私達は、君を歓迎しよう！」

「ようこそ!!」

仰々しく述べた男性に続き、作業をしていた人達も、少女の方を向いて笑顔で歓迎の意を表す。

なるほど、たしかにアットホームらしい。コウは、秘密基地の堅いイメージが払拭されたのを感じた。

「??よろしく」

「私は、練宮省吾^{ねみやしょうご}。このWay Markの指揮監督者だ。よろしく！」

快活に笑う練宮省吾と名乗る男は、確かに指揮監督者に相応しい雰囲気、カリスマを纏っていた。

「何せ、君の発覚は突然のことだったからな。大したもてなしも出来ないが、許してくれ」

「いや、別に??」

「また今度、日を空けてから、君の歓迎会を開くことにする。楽しみにしててくれよコウ少女！」

ああ、なんと言うか??熱い人だなあ。自分の周りにはいないタイプだからか、コウは珍しさを覚えた。

すると、コウ達の入ってきた扉がカシユンというこれまた近未来的な音を立てて開くのが分かった。

「^{かぶらぎ}楠木コウヒ、到着しました」

扉から現れたのは、三つ編みにした茜色の髪の毛を揺らす少女。大きく丸い目を、見覚えのない顔、コウに差し出して握手を求め。

「想語コウだよ。よろしく」

「うん、よろしくー」

恐らくは同じ年くらいだろうと予想する。他の二人は、大人びた雰

困気が強かったが、彼女は年相応の明るさがあった。

「これで、カノンを除いて全員揃ったな」

そう言うのと、レンカは省吾に目配せをする。

「ふむ。現在時刻は午後六時だが、我々について説明しても良いか？

なに、一時間程度で終わるさ。難しければ、後日でも構わない」

「??ちよつと確認してみます」

そう言うって、携帯を開くと、大量の通知と不在着信。ミキトリオからの安否を心配する旨のメッセージと、父親からの同様のメッセージを見て、コウは心が暖まる感覚を覚える。

コウは、まずミキトリオに返信し安否を伝え、明日はちゃんと学校に行くことと、また明日、とメッセージを送る。

そして、父親には無事を知らせ、二十時までには帰るが構わないかと聞くと、すぐに返信が返ってくる。

「あ、大丈夫です」

「そうか。では、早速??吉岡君、モニターを映せ」

吉岡と呼ばれた、スーツを着た優しげな雰囲気男性が頷いて、手元の機械を操作する。

すると、一室のモニターに資料のようなものが映し出される。

「まず、特殊指定災害『アンノウン』については知っているな?」

「三年前に現れた、人間が触れると膨張して弾け飛ぶっていう災害、ですよね?」

コウは、頭の中にある知識を答える。それに、省吾は満足そうに頷いた。

アンノウンは、特殊指定災害と呼ばれ、全貌は未だ未知とされているが、そのどれもが人間が触れると、たちまち膨張し、弾け飛んで死に至るという恐ろしい災害という認識が一般的である。

「ああ。その解釈で間違っていない。君が今日討伐したヴォーティガンもその一体、Aレートアンノウンだ。だが、私達人間が死に至るのは、彼らアンノウンを構成するレジエンダリーエナジーと呼ばれる特異エネルギーが、人間の身体に無理に適合しようとして、結果的に必ず失敗し、細胞が過剰に強化されて膨張、死に至るというメカニズム

がある」

「??なるほど」

そのレジェンダリーエンジーというものが、全ての諸悪の根源であるということは、今の説明で理解出来た。

だが、それでは、セイヴァーギアの存在については明かされていない。

「そして、セイヴァーアースの纏うセイヴァーギアは、アンノウンと同じく、レジェンダリーエンジーで稼働する。太古から語り継がれる、伝説的アイテムの数々。その断片を加工して、アンノウンを倒す為の矛としているのだ」

「つまり、セイヴァーギアじゃないと、アンノウンは倒せないから、セイヴァーアースが纏って戦っている、と」

意味は分かるが、理屈が分からない。どうして、セイヴァーアースでなければならぬのか。

いや、多分、分かっている。

「セイヴァーギアでなければ、彼らを打ち倒した武装でなければ、彼らを討ち滅ぼすには足りない。凡庸な近代兵器は、その全てが、奴らを透過して無効化されてしまう。だからこそ、君たちの出番、というわけだ。情けない私達を許してくれ??なんなら」

「あーもう、そういうの良いつて、司令」

申し訳なさと、悔しさを噛み締めたような顔で頭を下げる省吾に、コウは困惑してしまう。

それを見かねたのか、レンカが、頭を掻きながら心底どうでも良さそうに省吾の話を遮る。そして、コウの方を向いた。

「コウは、降りるつもりは無いんだろ?」

「??勿論だよ。何より、リンゼと約束したからね」

「コウ少女??すまない、愚問であつたな」

省吾は、もう一度頭を下げて、コウを見やる。そして、視線を戻してモニターを操作するよう指示を出した。

「??そして、君の持つエクスカリバー、リンゼ少女の持っていたセイヴァーギアExcallybur／HLの完全品、Excallybur

／PFは異例中の異例、特例中の特例である初のパーフェクトセイヴァーギアである、ということを理解して欲しい」

「??初??」

つまり、コウの持つこととなったセイヴァーギア、Excaltibur／PFは、初のPerfect Fを冠するギアだということ。セイヴァーギアの細かいことについてはまだほとんど知らないコウでも、それは、何となくわかった。

「だからこそ、君はこの戦いに足を踏み入れた時から、困難な道に行くことになる。強きセイヴァーギアの纏い手は、そうであった。そして、パーフェクトセイヴァーギアを纏うということは、その受難を追体験するかの如く、君に困難が襲いかかる。運命力だ」

「運命力??」

その言葉は、何故かストンと収まった。今日のあの出来事も、運命力による何かだと思えば、どうしてか納得出来る。

「だからこそ、私達大人も、当然君達に最大限援助を行う。すまないが、生命を私達に貸してくれ」

その言葉に、コウは迷いなく強く頷いた。

◇

その後、説明を受け、本人用の書類に手続きを済ませたコウ。

そして、帰宅する為、レンカとユウヒに案内されながら、彼女は通路を歩いていった。

「まあ、あんまし面白いもんねえけど、こんぐらいか?」

「だね。後は??いや、ワープ装置はまた今度、ていうか、絶対使うし、その時説明すれば良いよね」

ワープ装置という単語が、とても気になったが、コウはまた今度聞けば良いかと考えた開きかけた口を閉じた。

そうして、通路を歩いていると、外の風が吹き込んでくる。その元であるゲートを潜ると、一行は外に出た。

「ここが出口だ」

「結構、物々しいんだね」

そこは明らかに民間用や漁船用じゃない港が併設された格納庫のような場所。映画などでしか見ないような軍隊用の車やヘリコプター、潜水艦などが、設置された明るいライトに照らされていた。外は、すっかり暗くなり、四月の未だ肌寒い風が、少女達に吹き付ける。

「ううー、さっむい??」

「ふふふ」

「はは、おじさんっぽいよ、ユウヒちゃん」

レンカが、手で二の腕を擦る仕草をする。

コウとユウヒの二人は、それが面白かったらしく、笑いを誘った。

レンカは、そんな二人の様子と指摘に唇を尖らせて抗議の意志を示す。だが、それも辞めて、二人の両肩をポンと叩いて来た道を歩き始める。

「じゃ、オレはまだ残るわ」

「レンカちゃん、頑張るね。皆の手だ」だあ、もう！ それは言わんでいい！ お子様ははよ帰れ！ じゃあな！」ふふふ」

足早に立ち去るレンカを見て、ユウヒは柔らかく笑みを零した。

第四話 翌日

翌日、コウは一人、通学路を歩いていった。

新品であつたはずのドロドロの制服を、夜なべして、出来る限り綺麗にしたコウ。そのせいか、目の下には小さくクマが出来ていたが、それよりも、肌貼られたかなりの数の絆創膏が周囲の目を引いた。

それによる奇異の視線に晒されながら、しかして、それらを意にも介さず、歩き続けるコウが考えていたのは、他でもない昨日の出来事。昔から人助けに憧れ、己の出来る範囲ではあつたものの、やれるだけのことを人に施してきた。そんな彼女は、三年前、アンノウンが現れたあの日から、警報後の見回りをするようになる。実は、人を救つたのは、昨日が初めではない。それこそ、数えてはいないが、何人も助けてきた覚えはある。その度に、幾度も死にそうになったことも。事実、行き過ぎた偽善だと理解してはいるが、それでもやりたいと、少しでも人を助けたいと考えてしまったのであるから、仕方が無いとコウ自身も諦めていた。

とはいえ、それが、このような非現実的なことに巻き込まれるきつかけになろうとは、彼女自身考えられるはずもなかったのだが。

「??まさか、僕が??こうなるとは、ね」

一人、呆れのため息と共に言葉を漏らしたコウ。

そんな彼女に声をかける存在がいた。

「あれ?。もしかして、コウちゃん?」

「あれ、ユウヒ?。どうしてここに?」

未だ桜の舞う校舎の前でコウとユウヒはばったりと出会した。

コウは、ユウヒの纏う、己と似たネクタイの色の違う制服を見て、納得した。

「にしても、まさかコウちゃんと同じ学校だなんて驚きだよ」

「そうだね、先輩」

「もー、先輩だなんて??まあ、嫌いじゃないよ」

満更でもないらしい。というより、後輩に先輩と呼ばれて嬉しくな

い人間もそういるものでもないだろう。

だが、どうしてだろうかと、コウはユウヒと会話し始めてから増えた視線に違和感を感じた。

「??何でもない、よね」

「どうかしたー?」

首を傾げて問うユウヒに、「なんでもない」と答えて、コウは校門をくぐった。

◇

階段でユウヒと別れ、綺麗な白いコンクリートの廊下をクラスの教室に向かつて歩いていると、コウにとって見知った二つの影が見えた。

それは、向こうも同じであったようで、コウの姿を認めると、コウに向かつて手を振りながら、走って向かってくる。

「コウー」

「おはよう、ミキ。おはよう、リオ」

「おはよ」

ミキとリオの二人は、なんだかんだ言っていていつも通りである。コウからすれば、それは嬉しいことであった。

ミキは、絆創膏だらけのコウの手足を見て、いつもは快活な笑顔を浮かべる表情を心配そうに曇らせる。

「ほんとに、心配したんだよー!」

「ごめんごめん。悪いと思ってるってミキ」

苦笑するコウと、コウに詰寄るミキを見るだけであつたりリオも、ため息を吐く。

「ミキ、そろそろやめなつて。それと、コウもコウだよ。私達、シエルターで本当に心配したんだから??」

「??うん」

普段、クールで冷静、平静さを失わないリオ。そんな彼女すらも、心配そうに表情を歪めている。

「ああ、これは相当心配させたな」、コウは二人を心配させたことに申し訳なく思うと同時に、自分をここまで心配してくれる二人に、心が

温まる感覚を覚えた。

「じゃあ、コウさんや」

「なんだい、そんな年寄り臭い喋り方して?」

「ふふふ。そうね、ミキには、そういうキャラは似合わないわよ」

「もー! 二人して、そんなところにツツコまないで!」

頬をふくらませて怒る仕草をするミキを見て、コウとリオは笑い合った。

だが、気を取り直したミキは、二人にある提案をする。

「今週の土曜日。暇なら、皆ですき焼き食べに行かない?」

「すき焼き?」

「こそ。今度新しくオープンするすき焼き屋さんが、馬鹿安いって、開店前から噂になっててさ! 一人1000円プラス税とかなんとか!」

すき焼きの相場がいくらかは知らないが、流石にそれは安すぎではないか? コウは、そんなことを考えながら、今度の土曜日に予定がないことを脳内で確かめる。

「うん、良いよ。急用でも入らない限りは暇だ」

「私も良いわよー。ただ、今月ちよつぴりピンチだから、2000円超えるようならキャンセルするから」

「だいじよぶ、だいじよぶ! 私の情報網に抜かりはない! 安心してたまえ!」

ミキの言葉に、漠然とした不安を覚えるリオを見て、そして、いつも通りな日常に、コウは自然と微笑んだ。

この日常は、守らなければ、僕は僕を認められない。そんな、純粹で在り来りな想いを抱き、コウは教室に向かった。

◇

そして、授業も終わった放課後。

コウは、一人、カモフラージュとして工業団地の方に設置されたWayMark司令部へ向かって、少し寂しげな住宅街を歩いていた。

そんな折、コウの後ろ姿に気が付き声をかける存在がいた。

「あ、コウ!」

「レンカ？」

今日はやたらと知人に会う日だ。そんなことを考える程には、今日のコウは呼び止められている。

彼女を呼び止めたレンカは、両手に何かの入った袋を提げて、口に何らかのお菓子を咥えている。ラフな男物の服を着ているのは、彼女らしいと言ったところか。

彼女の両手の荷物が気になったコウは、レンカに質問することに。
「んー？これか？」

コウの質問に、右手の袋を小さく掲げて首を傾げるレンカ。コウが袋の中を覗き込むと、そこには古いティーカップなどの調度品があった。

「？」

「オレの趣味さ。こうして、アンティークもん買って眺めたりすんのが好きなんだ」

「??なるほど、ね」

アンティーク、コウにとってはほとんど縁のないものだが、確かに雰囲気は嫌いじゃない。

頷くコウに、今度はレンカが質問を返す。

「コウは、これからWayMarkに出るのか？」

「練宮さんに呼び出されてるからね」

「そっか」と納得したレンカは踵を返してコウとは逆の方へと歩いていく。そして、数歩歩いた所で、立ち止まりコウに口を開いた。

「まあ、なんだ。オレの方が先輩なんだし、困ってることがあったらオレに頼れよ。オレ、学校無い日は暇だし、さ」

「??ありがとう、レンカ」

「そんだけ！」と言って早歩きで去っていくレンカの後ろ姿を見つめて、コウは微笑んだ。

そうして、目的地へと歩きだそうとして??

「貴女が、新しいセイヴァーズの人??ですか？」

「??君は？」

唐突に現れ、コウに問うた黒髪の少女は、コウの質問返しに黄色の

眼を開きハツとした顔になる。

そして、慌てて一礼をした。

「私は、現世カノン。WayMark所属のセイヴァーズ。??よろしく」

「僕は、想語コウ。同じく、WayMark所属のセイヴァーズだ。若輩者だが、よろしく願います」

現世カノンと名乗った少女は、コウが己をセイヴァーズだと宣った瞬間、安堵して胸を撫で下ろした。

対するコウは、カノンという名前に聞き覚えがあった。

それは、昨日司令室に行った時、レンカが零した名前。

「貴女も、司令部に行くんですか？ ??それなら、もしよろしければご

同行しても？」

「うん、良いよ」

ありがとうございます、と感謝の言葉を述べるカノンを見つめて、コウは何故か、これまでも救われてきた、胸のざわつきを感じるのであった。

◇

コウとカノンは、二人して他愛もない話で談笑しながら、司令室を目指して、司令部基地内の廊下を歩いていった。

最初は、控えめでポツポツとした話さなかつたカノン達であったが、コウが何回か話しかけるうちに打ち解けられたらしく、それなりには会話も弾んでいた。

「想語さんって、まだ中一なんだね??身長高いなあ??。私なんて、高一になってからはもう伸びる気配もしないの??」

「まあ、身長高いねとかは、よく言われるよ。まだ伸びてるけど??そろそろ止まって欲しいなあと思ったり、ね」

ため息を吐くコウに、カノンは「贅沢な悩みだなあ」と若干恨めしげに零す。

そうこうしている内に、二人は司令室に到着する。

そして、それぞれ指に嵌めたセイヴァーギアの指輪を、扉に備え付けられているスキヤナーに翳した。

「現世カノン、到着しました」

「想語コウ、到着しました」

うつすらと青い照明に照らされた司令室に入り、義務である到着報告を行うと、いつかの優しげな雰囲気よしかたダヒサの男性、吉岡忠尚と、黒髪の少女宮野リンゼが司令室に備えられたソファに座りながら、二人を出迎えた。

「宮野さん、吉岡さん、こんにちは」

「リンゼ、吉岡さん、こんにちは」

「ああ、二人ともよく来たな」

「こんにちは、二人共。コーヒー入れてくるから、待ってておくれ」

コーヒーを入れると言って席を外した吉岡と代わるように、二人はリンゼの反対側のソファに座った。

「あの、練宮さんは？」

コウは、己を呼び出した人物が、見回してもいないことに疑問を覚え、恐らく知っていそうなリンゼに問い質す。

リンゼは、その質問に申し訳なさそうな顔をして答えた。

「司令は、急な会議が入って、今日は来れないそうだ」

「??急な会議??」

省吾はWayMarkの、特殊指定災害対策部のリーダーであるのだから、そういうこともある。コウは、納得して、なら、これからどうしようかと考えに耽った。

そんな様子のコウを置いて、リンゼはカノンに話し掛ける。

「カノンは今日はどうしてここに？」

「えつと??医療班班長の鈴木さんに呼ばれて??」

「ああ、今日は健康診断の日だったか??」

カノンは、コウやリンゼ、ユウヒやレンカ達と違って東京ではなく、栃木県に住み、栃木県の高校に通っているため、他の面々とは健康診断の日程がズレているのだ。

「そろそろ、時間なので私は行きますね」

「ああ」

カノンは一礼をして、司令室を去っていった。

その時、丁度忠尚がカップの二つ載せられたトレーを持って二人の元へとやってくる。

「あれ、カノンちゃんは何処に？」

「あはは??健康診断らしい、です」

「コーヒーは私がもらおう」

忠尚は、二人にコーヒーを渡し、「じゃあ、そろそろ仕事に戻るね」と言っけてモニターデスクへと向かっていった。

コウとリンゼ、忠尚と他の職員数人以外に、人が居ない為、今日の司令室はやけに閑散としていた。

そんな時である。

司令室のモニターの全てに、けたたましいサイレンと赤いWARNINGの文字と何らかの座標を示した地図が表示された。それが、意味することはただ一つのみ。

「コウちゃん、せつかく来てもらったのに申し訳ないんだけど、アンノウンの出現が感知された。出撃、お願いできるかい？」

「??はい!!」

忠尚の要請に、コウは力強く頷いた。

リンゼはセイヴァーギアを持たず、カノンは直ぐには来られないだろう。

コウは、一人で戦うという状況、二日連続での実戦に気を引き締めた。

第五話 力量

アンノウン出現の報せに、コウは一目散に基地から地上まで駆けた。

悠長にしている間に、人が死んでしまうことは、アンノウンの恐ろしさを知っていれば誰でも分かる。

『ごちら、司令室。コウちゃん、聞こえているかい?』

「はい、聞こえています」

出る際に渡され、耳につけたインカムから聞こえる、忠尚の手に返答する。

これで、司令室といつでも通信することが可能だとか。戦闘中に壊れたりすることも多々あるらしい為、大事に扱おうとコウは考えた。

『アンノウンの出現場所は、世田谷区付近。大田区からなら、ギアを纏った状態で全力疾走すれば、十分で着く。ユウヒちゃんにも援護を要請してある。だが、コウちゃんの方が早いだろう』

「了解」

なんでも、レンカはセイヴァーギアのメンテナンスで、一度司令部まで取りに来なくてはならない。ユウヒは、特に問題も無かった為、駆け付けられるとのことらしいが、それでも、出力の問題や距離的な問題で言えば、コウのパーフエクトセイヴァーギアの方が早い。

ならば、悠長にしている暇はない。

コウは、空色のラインが入った指輪、セイヴァーギアを嵌めた右手を胸元に、起動式を詠唱する。

「Perfect Excalibur Start-up!」

瞬間、あの時のように、コウの全身を光が包み込む。

そして、晴れたところには??

『最短ルート上の民間人は一人も居ない。安心して駆け抜けて良いよ』

「想語コウ、行くよー!」

黒いインナーの上から、空色のボディーマーを纏い、右手に金色の剣を装備するあの時の姿。赤いマントを靡かせながら、光の沈ん

だ夜空の下、少女は疾駆した。

◇

夜の街を疾走しながら、コウは辺りを見回す。

明かりは灯る街には活気がない。不自然な程に人が居ない。いや、事実、一人もいないのだから活気が無いのも当たり前か。

「確かに、誰も居ないですね?？」

『自衛隊に協力してもらったからね。色々もあるんだけど、こういう時には協力してくれるし、なんだかんだ言つて皆、人の命を大切に思つてくれてるんだろう』

「??なるほど」

自衛隊の名前を出した時の、彼の声音には疲れのようなものが滲み出ていたが、それでも、彼らを信頼しているというのも伝わってきた。

この、戦わない国日本だからこそ、セイヴァーギアの所持というのは色々あるのだろう。自衛隊との折り合いも悪いのかもしれない。

閑話休題。

「そろそろ、目的地に到着します」

『了解。敵は、数十のCレートと四体のBレート。まだ戦い慣れていないだろうけど、コウちゃんとセイヴァーギアの力なら大丈夫だ！頑張れ!』

「??はい!」

Cレートのアンノウンは、無名かつ数が多いだけで単体の戦力は低い。Bレートのアンノウンは、同じく無名ではあるが、単体の戦力はそれなりに高い。だが、数は少ない為、各個撃破を意識すれば問題ないと、昨日、省吾から聞いていたコウは、それを踏まえて戦場に乗り込んだ。

パーフェクトセイヴァーギアであろうと油断はできるわけがない。セイヴァーギアの個々の戦闘力は、平均すれば皆ほとんど等しく、HL、半分ならば出力は高くとも装着者への負荷の大きさから継戦力は低く、FM、欠片は逆に出力が低い代わりに継戦力が高くなっている。そして、PF、完全全がどの程度の強さなのかは未だに未知ではあるが、それでも飛び抜けた力を持つ訳では無いだろうというのが、

現状の見解であった。

コウは、目的地である大きな公園に、進軍するアンノウンの群れを見つけると、勢いを付けて飛びかかる。

『KYRrrrrrrrr!!』

「はあ!!」

狼や鼠のような個体から、人型や完全な異形まで、全て真っ黒なシルエットのようなクレートアンノウンの中に正面から突っ込み、エクスカリバーを一閃。

そのまま、緑の芝生に転がるように着地する。

外敵の存在を認識したアンノウン達は、コウを取り囲むように集まった。

『KUUAAAaa!!』

「分かっているよ!」

横から襲いくる鼠型のアンノウンを斬り捨て、粒子に帰すと、今度は、後ろから来る人型を振り向きざまに斬り払う。

その動きには、技術はなくとも切れの良さがあつた。

「案外数が多いね?」

アンノウンの数の多さに、時間がかかり過ぎることを理解したコウは、エクスカリバーの持ち手を握り込む。

すると、エクスカリバーの黄金の刀身が割れ、赤いライン、レジエンドリーエナジーが流れるように、剣の根元に集中する。

「行くぞ、アンノウン! 『エクス??』」

そして、赤い電光が迸り始めたエクスカリバーをアンノウンに向けて勢い良く突き出す。

『??バースト』オ!!!」

その瞬間、割れたエクスカリバーの刀身の間から赤い閃光が解き放たれる。それは、アンノウンを瞬く間に飲み込んだ。

「まだ、まだだね?!」

コウは、もう一撃、エクス・バーストを放とうとしてエクスカリバーを構える。

そして唐突な脱力感と目眩、身体から走る激痛に膝をついた。

「うぐっ?!?!? けほっけほっ?!?血? なんて?!?!?」

咳き込むと、コウの口からは紛れもない血が吐き出された。それも、かなり多量の血液。鎧からは、昨日も聞いた何かが割れるような音が聞こえ始める。装甲の空色にも陰りが。レジエンダリーエナジーの供給が滞っているのだ。その原因は、予想が付く。

コウの顔から血の気が引いた。

『コウちゃん! バイタルが危険値に突入している! その身体では戦えない! いや、戦っちゃダメだ!』

「??くそ、まだ、やれるんだ?!?!」

コウは、エクスカリバーを芝生の地面に突き刺し、支え代わりにして立ち上がる。だが、その姿に覇気はなく、ふらふらとして今にも折れそうな雰囲気があった。

しかし、折れるわけにはいかない。誰かを救うという想いに、偽りは無いのだ。

『ダメだ! 撤退しろ! コウ!』

「リンゼとの約束を果たす為にも??立ち上がらなきゃいけない。ああ、また戦える気がしてきた」

忠尚の代わりにコウに撤退を促すリンゼの声を聞いて、コウの眼には、また決意が漲った。

そう言うコウの鎧には、確かに光が戻り、鎧のヒビも消えつつあった。セイヴァーギアの動力は、纏い手のなんらかの決意であり、それに種類は関係ない。約束を果たそうと決意すれば、それすらもセイヴァーギアは動力として取り込む。そして、力を与えるのだ。アンノウンを屠る為の、救済の力を。

だが、セイヴァーギアは、纏い手の傷を癒しはしない。装着者へ与えるのはあくまでも「力」のみであり、癒しは与えない。

「こっぴっ??くそ、痛いじゃないか??だけど??まだやれ「いや、駄目だよコウちゃん。後は、私がやる」??え???」

胸の痛みに顔を歪め、吐血するコウの前に、何者かが立ち塞がった。その何者かは、茜色の髪の毛をポニーテールにした少女。コウの学校の先輩にして、セイヴァーズとしての先輩である鎬木ユウヒであった。服装は、制服ではなく、私服。走ってきたのか少し汗をかいていた。少女は、汗を腕で拭うと、アンノウンの方を向く。

そして、少女は茜色の光を灯す銀色の指輪、セイヴァーギアを掲げて宣言する。

「Half Durandal Start-up!!」

ユウヒの身体を、コウやリンゼと同じように光が包み込み、そして、一瞬でその形を露わにする。

そこに居たのは、インナーの上から下半身、胸から首、手元に茜色の軽装甲を纏ったユウヒ。それが、セイヴァーズとしての、デュランダルの担い手としての鎬木ユウヒの姿。

首元の装甲は頬まで包み込んでいるが、ユウヒは露出している部分である口を開く。

「コウちゃん、少し無理し過ぎだよ。まだ二回目なんだし、今回はそこで見てて」

「ユウヒ??」

そう言うと、ユウヒはコウに親指を立てると、右手を横に振り払う仕草をする。

「サモン、デュランダル」

宣言と共に、虚空から滞空する十数本の、銀色の刀身に真中に青いラインが入った短剣を生み出した。

「シュート!」

『K U A A A A!』

掛け声と共に、短剣が全てアンノウンに向けて射出される。

一本一本が、アンノウンを貫き倒す。圧倒的であった。

しかし、足の早い人型の個体がユウヒ目掛けて飛びかかる。短剣の射出も間に合わない。

走って間に合うかと、コウが足を動かすものの、それは杞憂であつ

た。

『A A A A A!』

「??せいやあ!!」

腰を落とす、一瞬で力を溜めたユウヒによる茜色の装甲を纏った拳の一撃が、飛びかかるアンノウンに炸裂。アンノウンは、後ろにいた数体のアンノウン諸共一瞬にして粒子となった。

「凄いや?」

実際、クレート相手とはいえ、それらに対して必殺技を使わず、容易く快進撃を繰り返している辺り、己との練度の差を否が応でも感じさせられる。遠距離には召喚したデュランダルの射出で対処、近距離にはそのまま拳で。無理ならば、ギアの軽さも相まった身軽さで全てを回避する。

コウは、自然と漏れた感嘆の言葉に、それとは別の感情を覚える。

「まだまだあ!」

『W O O O O!』

そんなユウヒを止めんと、クレートのアンノウンとは格の違いを感じさせる様な、そんな異形、四体のブレートアンノウンが立ちはだかった。

しかし、それを見ても、ユウヒは止まらない。それどころか、不敵な笑みを浮かべる始末。

「サモン、デュランダール!」

そうしてユウヒは、もう一度デュランダールを召喚する。

そして、先程と同じように射出した。

「シュート!」

『A A A A A!!』

だが、クレートのように一瞬で消えるほどヤワではなく、ブレートアンノウンは硬い表皮で、デュランダールの貫通を防いだ。

だが、ユウヒの狙いは、ソレであったのだ。

「必殺、『デュラン・カーネイジ』!!」

『A A A A A A!?!』

アンノウンの苦悶の声が聞こえた。

その宣言で、深く突き刺さったデュランダルから生え出るようにして、同じようにデュランダルが生み出されたのだ。それが、アンノウンの身体を、内側から貫いたのである。

それによって、四体のBレートアンノウンは、レジエンダリーエナジীর粒子へと帰った。

「あと少し、辛抱しててね、コウちゃん！」

ユウヒは、コウにウィンクすると、残ったCレートに向き直り、構えを取った。

◇

最後の一体を粒子に帰し、ユウヒは変身を解いて、元の私服姿に戻る。

苦しさなど欠片も見受けられず、己と違って余裕のある姿に、コウは、誰かを救いたいと言うだけで、力を満足に振るえぬ己が情けなくなつた。

「終わったよ。さ、帰ろうかコウちゃん」

「??うん」

セイヴアーギアの負荷によるダメージとはまた違った意味で、元気の無いコウの様子に、思い当たる節のないユウヒは首を傾げる。

「どうかしたの?」

「??いや、ユウヒは強いんだって??」

コウの言葉に、ユウヒは困つたように苦笑した。

「別に、私は強くないよ」

「だけど、僕なんかよりも迅速且つ効率良く、アンノウンを撃滅したじゃないか」

実際、コウがそこにいたことよって、襲ってきたアンノウンからコウを守る為に時間を割かなければ、本来ならもっと早くに倒せていたはずだ。

コウからは、それを悔いる雰囲気がありありと感じられた。

「うーん??コウちゃんはさ、強くなりたいんだよね?」

「??ああ」

ユウヒは、変身が解けて脱力感から公園のベンチに寝転がるコウの

隣に座って、ライトに照らされながら話を続ける。

「ならば、自分を大事にしなきゃ」

「自分を大事に？ みんなが困っているのに、戦える僕がそんなことを言っているのも良いのかい？」

不思議そうに首を傾げるコウを見て、ユウヒは苦笑を零さざるを得なかった。まさか、なんで自分を大事にしなきゃいけないんだ？ みたいな返答が返ってくるとはおもいもしなかったのだ。

「そう。自分を大事にしないと、継続的に皆を守れなくなっちゃうじゃん？」

「??まあ、確かにそれは一理あるかも、ね。そうだとすると、でも、僕が強くなるならないとは話は別だ」

頑なな姿勢を崩そうともしないコウ。

そこで、ユウヒはある提案をする。

「それならば、リンゼちゃんに頼りなよ」

「リンゼに？」

ユウヒは、その真意を語る。

リンゼであれば、直剣を使い慣れているから、戦い方の教えを乞うことが出来ること。リンゼはそれなりに戦場を戦い抜けてきた歴戦のセイヴァーズ、だから、経験も豊富なこと。

そして、何より、今やコウのセイヴァーギアとなったエクスカリバーの、元纏い手であるということ。

「??なるほど??良いかもね。ありがとう、リンゼに聞いてみるよ」

「うんうん。それじゃあ、司令部に帰ろうか」

少しは納得した様子のコウを見て、満足そうに頷いたユウヒは、苦しげに寝転がるコウを一瞥する。

そして??

「よつこらせつと??あれー? コウちゃんって、案外軽いんだねー?」

「わひゃっ!! お、重いだろ!! 下ろしてくれ!」

「だーめ。怪我人は無理しないの」

身長がコウよりもそれなりに低いにも関わらず、持ち上げ、背負うことが出来たことに、ユウヒは驚きを示す。対するコウはと言えば、

突然の行動に目を丸くして慌てた。

驚きの声を上げるコウを他所に、ユウヒは駅に向かって歩き始めるのであった。

「にしても、本当に軽いね??私の三分の二くらい?」

「あまり、肉がつかないから、鍛えてもそんなに筋肉が付かなくてね??」

深刻そうに話すコウに、ユウヒは笑みを零した。

第六話 影

翌日の放課後、コウは早速司令部へと赴いていた。

昨日、あの後、診断によりどういうわけか登校許可が出た為、コウは通常通りに登校した。リンゼや忠尚、ユウヒには心配されたが、昨日の今日で学校を休むわけにもいかない判断してのことでもあった。

ユウヒの言うことも最もであり、今強くなる為には、誰かに誰かに師事して、戦い方を知る必要があった。

その点、エクスカリバーの先代保有者であるリンゼは、これ以上ない適役であった。

「で、私に師事したい、と」

「そうなんだ。??駄目、かな?」

口を固く結び、悩む仕草を見せるリンゼであったが、しばらくすると、コウを見つめて口を開いた。

「私や、レンカ、カノンは高校生だから、アルバイトとしてこの責務をやる。だが、コウやユウヒはまだ中学生だからな。法律上は、学業優先だ」

「??でも」

「でも、じゃない。私とお前では、立場が違い過ぎる」

中学生は、法律上、アルバイトをすることは難しい。出来ないことはなくとも、高校生とは違って、圧倒的に制限が多すぎるのだ。

そんな状態を前に、コウが軽く絶望に飲まれかけた時、しかし、リンゼは手を伸ばした。

「だが、まあ、放課後であれば、問題は無い。良いぞ、私がお前を指導してやる」

「??ありがとう、リンゼ!」

なんだかんだ言っつて、少し嬉しいんだろうなあ、とはその場に居た職員達の感想である。



コウがリンゼに指導の約束を取り付けていた時、レンカは基地に備

え付けられた港から、海を眺めていた。

その隣には、黄色い眼の少女、現世カノンの姿が。

「今日は、珍しいな、カノン」

「まあ??何故かは知らないけど、学校が休みだったから??」

カノンは、アジア支部WayMark所属のセイヴアーズの中で、唯一住んでいる場所が他のメンバーと離れている。

その為、支部に顔を出せることは少ないのだ。

「ただ、そろそろ私の方に、基地と直通のテレポーターを作るみたいなのを言ってた、けど??」

「へー、そりやまた豪勢なことだ」

「才原さんの家の協力」

「ええ??」と言って肩を落とすレンカを見て、カノンはふふふと微笑んだ。

レンカの家は、WayMarkの表面上のスポンサーと、資金提供者を務めている大手のブランド。その為、WayMarkの開発には、大抵資金提供を行っているのだ。

まあ、本人は少し心苦しく思っているようではあるが??。

「ま、カノンもやっときさ、連携に参加できるわけだ」

「??うん」

連携という言葉に表情を曇らせたカノン。

レンカは、それを見て気分を悪くしたとでも言うかのようにガシガシと頭を搔く。一瞬、チラリと見えた顔の火傷跡に、カノンは悲愴さを感じる。だが、それを指摘しても、彼女が良い気分になることは無さだろう。そう考えた、カノンはそれを見なかったことにした。

ズレた白いストールを直しながら、レンカは諫めるようにカノンに語りかける。

「??ちつ、お前、まだいじめられてんのかあ? つたくよお??気にすんなとか、そんなことは言わねえけど、何か言わねえとなんも変わらねえぞ?」

「??分かってるよ??でも??」

「だあー、もう! でも、じゃねえ! 苦しそうな顔すんなら、それを

どうにかする努力をしやがれってんだ」

カノンの煮え切らない態度に、生来から短気で深くは抱え込まないタイプのレンカは、小さくイライラを募らせる。

しかし、その声音からは、本当に心配している、という気持ちが伝わってくるのも事実であった。

「??ありがとう、才原さん??だけど、もう少し待って??まだ、怖いのか?」「わりの、オレも言い過ぎた。だが、辛くなったら、仲間を頼るってのも良いもんさ」

「??うん」

「ま、頑張ろうぜ」

頷いたカノンを見て、レンカはその場を立ち去ろうとする。

だが、その時、基地内のサイレンがけたたましく鳴り響く。そして、二人のインカムがそれぞれ鳴動した。

急ぎ、耳に装着すると、インカムからはリンゼの声か。

『二人共、近くに居るな?』

「ああ」

「??うん」

何でも、セイヴァーギアが無くなるうとも、何らかの役に立ちたいと、リンゼはオペレーターを引き受け、また、機材操作についても勉強しているらしい。

リンゼらしいと、レンカは笑った。

『場所は、そう離れていない。だが、昨日の戦闘のメンテナンスで、ユウヒのギアはこっちにある。コウには、お前達の戦闘を見てもらう為、二人にやってもらおう。難しそうなら、コウも行かせるが??』
「いんや、オレ達だけで十分だ。オレ達二人だけに任せるってことは、大して不安要素のある敵ってわけでもないんだろ?」

『ああ、Bレートが二体のみだ。ここのところ、立て続けにアンノウンが出現しているが、此方もいろいろと調べている。取り敢えず、調査報告はよろしく頼む』

「はっ、そういうのは後で言うもんだろ??ちくしょう、めんどくせえなおい」

調査報告の言葉に、あからさまに面倒臭そうに顔を歪めるレンカ。二人は、提示された出現場所まで移動する為、走り出した。

司令部のある大田区から、目的地までは三キロ前後。走れば十分間に合う距離ではあった。

「案外、近いみたいだな」

「??うん??でも、エナジーが勿体ないからって、走る必要あった?」

「良いんだよ。走った方が訓練にもなるしよ」

そう言うレンカは、まるで危機感を抱いていないように見えた。

逃げ惑う人々を掻き分けながら、二人は人の波をアンノウンの方向へ逆走する。

「??はあ」

「ま、Bレート二体だし、ストレス発散程度にでもやろうぜ」

実際、Bレート程度であれば、今までも幾度となく倒して来ている。

Aレートは片手で数える程、しかも他のセイヴァーズとの共同でしか討伐していないが、それでも、経験はあった。また、数が多いならともかく、Bレート二体ではそれほど民間人に被害が出る恐れがあるわけでもない。

「今更、Bレート如きに遅れをとるわけもなし。てか、そろそろSレートと戦いたいぐらいだ」

「Sレートは??流石に??」

Sレート、それは接触禁忌対象であり、討伐にはそれなりの経験を積んだセイヴァーズが徒党を組んで当たる必要がある存在。それでも、討伐出来るかは五分五分である辺り、かなりの強さを持つネームド个体だ。

「んなことは、まあ、どうでも良いか。そろそろ着くぜ。変身??! Fragment Amenohabakiri Start-up!!」

レンカは立ち止まり、指輪を横に振り払いながら詠唱する。

光が包み込み、彼女をセイヴァーズに、戦士に変える。

腕、肩、腰、脚にダークブルーの軽装甲を纏い、その右手には鏢と反りの無い黒い刀身の刀アメノハバキリを装備したその姿が、才原レンカのセイヴァーズとしての姿。

レンカは、変身しようとリングを触るカノンの腰に手を回して抱き抱える。

「すう??じゃ、跳ぶぞ」

「??へ?」

レンカは、アンノウンの暴れる音が聞こえる住宅街へと向けて、跳んだ。

「ほらよつと! ちゃんと受け身取れよ!」

「なんで、投げるの?!?」

あろうことか、空中でレンカに投げられたカノンは、慌ててリングを胸元に翳して、詠唱する。

「Fragment D·insleif Start—up
?!?!」

目を瞑り、光に包まれ、カノンはその姿を変える。

そして、地面に綺麗に着地した時に光が晴れ??

「殺るわよ」

足元から無数の彼岸花が現れては散っていく。

和風の赤いローブに身を包んだカノンは、緋色に白のラインが入った直剣ダインスレイブを振り払うことで彼岸花を描き消し、その閉じた双眸を開く。

その目は、血のように赤かった。

「にしても、なんで変身するだけで変わるかねえ」

「??変わっていない。ただ、少し我慢が効かなくなるだけ」

「それが変わるってことだよ」とレンカは苦笑するが、カノンはそれ在意にも介さず、二体のアンノウンに向けて剣を向ける。

「才原さんは、手出ししなくて良いよ??私ひとりで殺る」

「あーいあい、わーったよ。ま、ヤバそうだったら??って聞いてねえし」

カノンは、剣を振り払い、疾駆する。

FMのセイヴァーギアとは言え、纏っている時の馬力は軽く短距離走世界一位の記録を超える。いや、そんなものは比ではない。

文字通り、瞬きの間に十数メートルを駆け、アンノウンの前に立ったカノンは、ダインスレイブを一閃する。

「はあっ!!」

『G A A A A!?!』

3メートルはある巨大な人型アンノウンの片腕を斬り飛ばし、返す太刀でそのまま、片足を斬り捨てる。

体勢を崩して片膝を付くアンノウンの首にダーインスレイブを突きつけ、カノンは薄らと嗤った。

「大丈夫だよ。私、慈悲深いから……たっぷり遊んであげるっ!」

もう一体の虎のようなアンノウンが、カノンに襲いかかろうとする、その足元から彼岸花が現れ、人の腕に形を変える。そして、アンノウンを拘束した。

「まだ、待っててね? 後で遊んであげるから」

『A A A A A A!!』

アンノウンには、恐怖の感情は愚か、感情そのものが備わっていない。しかし、レンカの目を通して見た二体のアンノウンからは、おぞましい何かに恐怖するような感覚が伝わってきた。

「ほら! ほらあ!」

『A A A A! G A A A A A!!』

片腕と片足を失ったアンノウンの身体を、ダーインスレイブで斬りつけていく。その姿は、まるで遊んでいるよう。

「??おい、カノン。そろそろ、終わらせろ。解禁令出さなきゃいけない」

「分かった。もう少し遊びたかったけど??まあ、仕方ないよね」

そう言つて、カノンは俯き力なく項垂れるアンノウンの首を切り捨てた。頭を失ったアンノウンの身体は、瞬く間にレジエンダリーエナジীর粒子へとなり風に消えていく。

「つたく、オレの出番ねえじゃねえかよ」

「また、今度。頑張つて」

そして、腕に取り押さえられて藻掻く虎型アンノウンの首も同様に跳ね飛ばし、カノンは、見物するレンカの元へと寄った。

「ま、次はオレがやらせてもらおうわな」

「うん」

そう言つて、変身を解こうとした時??二人のインカムに通信が入る。

『??二人共、すまないが新たなBレートアンノウンの反応だ。数は四。そこから、あまり離れていない』

「??了解」

「じゃあ、次は才原さんに任せるよ」

「当たり前だ」、そう言つて、レンカはもう一度跳躍し、アンノウンの方角へと向かつていった。



そんな二人を、否、アンノウンの姿を、太陽に照らされたビルの上から見つめる者の姿があつた。

サングラスの下に見える眼は、冷静冷徹に、状況を見据えている。

「The condition of Solomon's ring is better. At the earliest, next month we can enter final test.」

茶髪の少女は、右手に付けた銀色のラインが入った黒の指輪を見ながら、耳につけたインカムで誰かと会話をする。

「I know. I need to keep up with savors. Don't worry. No problem.」

そう言つて、少女はインカムを外して、踏み砕いた。そして、手元の指輪を見つめて、ため息を吐いた。

「はあ??源流から力を分岐させて、アンノウンを使役させられるなんて、便利な代物だよねえ」

すると、屋上の扉が開き、スーツに身を包んだ男達が現れる。

そのスーツには、WayMarkのシンボルであるアジアのシルエットに人差し指を立てた手、国家特務機関特殊指定災害対策本部による人類の道標を意味するマークが描かれていた。

「見つけたぞ、識別指名手配ヒューマノイド、コードJ。そのソロモンの指輪を我々の元に返却し、ご同行願おうか」

そう言つて、銃を構えた男が立ち塞がる。

勧告に、少女は鼻で笑うと、その手の指輪を構えた。

「無理だね。死ぬのは貴方達だよ！」

「な!?! 総員、戦闘配備！」

指輪が銀色に輝き、そして、異界より門が開く。

そこから、巨大な腕が現れた。少女は、その口元を小さく歪めた。

「もう、終わつてるんだなあ」

「??くそツ??これが??ソロモンの指輪の力か??!」

残った最後の一人も、現れ出た一体のアンノウンにより触れられて、屋上の赤となった。

第七話 父

コウとリンゼは、WayMark司令部の地下に造られている訓練用ルームにて、スポーツウエアを着て木刀を構え向かい合っていた。「さて、特に問題もなければ、始めよう」

「はいー」

一昨日の二人の戦いをみて、己の力の無さを理解したコウは、昨日今日と放課後に、こうしてリンゼと武器の扱い方を訓練しているのである。

「昨日の打ち合いで分かったが、コウの太刀筋にはキレがない。セイヴァーギアを纏った状態であれば、キレがなからうと多少は戦えるだろう。だが、そんな力任せな戦い方では、また血を吐くだけだ」

「??」

あのコウの吐血は、力任せに扱ったセイヴァーギアの出力に、コウの身体が耐えられなかったから、そういうことで一応の完結を見た。実際、そうだったのだから、コウも特に反論しなかったし、それでもっと力を手に入れたいたいと考え始めたのだから、結果的には明日へ続く怪我だったのだろう。

「だから、最低限の力で私を殺すつもりで来い」

「??ッ!はああ!!」

コウは、木刀を構えてリンゼから言われたことを噛み締めながら、突貫する。

最低限の力で、リンゼを殺すつもりで行く。今の、自分にかけている効率。

「まだ、無駄が多い?!」

「ぐうっ!」

リンゼは、コウの一撃を上体を逸らすだけで避け、手加減しながらコウの身体を蹴り飛ばす。

そのまま、それなりに硬さのある床に叩き付けられたコウ。しかし、すぐさま立ち上がり、もう一度木刀を構える。

「??はあっ!!」

「足りないな??今度は、力が足りていない!　それで、私を殺せるものか!」

柄の底で木刀を握るコウの右腕を殴打し、後ろ回し蹴りを加える。衝撃で、吹き飛ばされたコウは、後少して壁にぶつかるといふところ、誰かに受け止められた。

「おっと??コウ少女、少し軽すぎるんじゃないか?」

「??練宮さん?」

「おう。リンゼ少女も、元気そうだなによりだ」

「司令??」

その人物は、少し前から司令部を留守にしていた練宮省吾であった。

彼は、二人の様子から何をやっていたのかを察して、朗らかに笑った。

「ははは??訓練とは精が出るな、二人共」

「僕がリンゼに師事して??」

そう言うと、省吾は目を丸くしてリンゼとコウとの間に視線を行き来させた。

「まさか、リンゼ少女が?　??それは??良いことだな。リンゼ少女も、とうとう先輩らしくなってきたな」

「??いえ、エクスカリバーを託した者、先達として当然の義務を果たしているだけです」

「そういうのを、先輩らしいって言うんだよ」、そう言って省吾はリンゼの頭を、その大きな手で撫ぜた。

「??それで、司令はいつお帰りに?」

「ああ、ついさっきだ。コウ少女のことと、リンゼ少女のことで上といろいろあってだな。なに、心配することは無い。私の方で、全てやっておいた」

いろいろ、と言うのはコウの参戦と、コウとリンゼの間での、エクスカリバーの引き継ぎのことだろう。

「それと、リンゼ少女。上から許可をもらって、『Follow Sign』に置いていた、前のセイヴァーギアを送ってもらえるよう、打診

してもらった。再来月くらいには届くだろうさ」

「カリバーンですか!？」

「ああ、そうだ。カリバーンで間違いない」

カリバーン、その名前は、アーサー王が、今だ王でなかった時に引き抜いたとされる王選定の剣。

つまりリンゼは、カリバーン、エクスカリバーと続けて適合した、アーサー王みたいな存在なのか、とコウはなんとなく考えた。

あれ以来、パーフェクトセイヴァーギアとなった影響からか、リンゼが触ろうとも、エクスカリバーはうんともすんとも言わなくなってしまった。

だからこそ、リンゼは己に何かできないかとオペレーターを引き受けるようになったのだ。そして、新たな剣を手に入れる、ということ。彼女はもう一度戦場に戻れるという事にほかならない。それが、良いことなのか悪いことなのかは分からないが。

そんなことを考えていると、省吾は、スーツのジャケットを脱ぎ捨てて、立て掛けてある木刀を手取る。

「どれ、私が二人同時に相手しよう。たまには身体を動かさねば、鈍ってしまふからな」

「練宮さん??」

「行きます、司令!」

「ああ、来い!」そう言って、木刀を構える姿は、まるで勇ましい剣豪のようである。

事実、コウと相対している時と違い、リンゼの顔には確かな緊張があった。

「司令は、私の師匠なんだ。連携の取れない私達二人で掛かっても勝てる見込みはない。先に私が行く!」

「??了解!」

そう言うと、リンゼは木刀を下段に駆け出した。

それに追従するようにコウも動き出す。

「はあ!!」

「疾ツ!!」

省吾はリンゼの木刀の軌道を逸らすと、柄でリンゼの腹を殴り付ける。それだけで、大きく吹き飛ばされるリンゼ。コウは、自分を容易く倒せるリンゼを、容易く吹き飛ばす目の前の巨漢に困惑した。

まだ、セイヴアーギアを纏つてのことであれば、分かる。だが、生身でそれというのは??明らかにおかしい。

「さあ、コウ少女も来い！」

「??ッ！ ああああ!!」

だが、こんなところで立ち止まるわけには行かない。

そんな、コウの決意を乗せた一撃は、省吾によつて意図も容易く受け流され、返しの一撃で、コウの意識は暗転した。

◇

気を失つて倒れ伏す二人の少女を見て、省吾はポリポリと頭を掻いた。その顔には、後悔が滲んでいた。

「いや??手加減足りなかったかなあ??」

「明らかにそうだろう。それ以外にあんのかよ」

いつの間にか訓練ルームに訪れていたレンカが、ため息を吐きながら、省吾を諫める。

「??はあ、私もまだまだ、だな」

「いや、あんたは、人の身であんなこと出来るのがおかしいんだって」
そう言つて、レンカは省吾の木刀を指差す。

「なんで、あんな派手に振り回したのに、木刀にヒビひとつ入ってねえんだよ」

「これは、技術だ。誰だつて、出来るさ。若さがあれば尚更、な」

「いや、出来ねえよ！　なんで、木刀一本でリンゼがあんな派手に空飛んでんだよ！　あんた、生身の人間だろ!?!」

「いやあ、あれは受け流し過ぎた」事も無げにそう言う省吾は、本当にそう考えている様子であつた。

レンカは、呆れ混じりにため息を吐く。

「ったく。リンゼ達は、オレが運んでおくから、あんたはさっさと居なかつた分の仕事してこい。書類、溜まつてるぞ」

「ああ、すまないな、レンカ少女。いつも、私達を支えてくれてありが

とう。大人は、出来ること、君達が安心して戦えるよう、仕事を全うするとしよう。では、行ってくる」

スーツを引っ搦んで背中に垂らすと、スーツを搦んでいない方の手で後ろ背に手を振って歩き出す。

その後ろ姿に、レンカはムスツとした。

「カツコつけやがって??カツコいいなあ、もう!」

吐き捨てる、レンカは、コウとリンゼの二人を脇に抱えて訓練ルームを後にした。

◇

「うう??ん」

コウが目を覚ますと、そこは、WayMarkに来てから何度かお世話になっている医務室であった。

辺りを見回すと、隣のベッドでは、リンゼが制服を着ていた。

そこで、コウは己がどうして医務室で寝ていたのかを思い出した。

そして、痛むであろう腹部を確認して、欠片も痛みがないことに目を見開く。

手加減、されたのだろう。それも、極限まで。

そのことに、悔しさを覚えると共に、憧れを覚える。自らも、あれだけ強ければ、選択肢も増えるだろう。

そんなことを考えながら、机の上に畳んであった制服を取ると、丁度着替え終わったリンゼと目が合った。

「起きたか、コウ」

「うん」

そう言うリンゼの顔には、気まずさのようなものが滲んでいた。

「コウの師匠になったというのに、司令に一太刀も与えられずじまいだった??自分が情けないよ。なんなら、司令に頼んだ方が??」

悲しげに顔を歪めたリンゼ。

コウは、そんなリンゼの肩に手を置いた。

「僕は、君に師事したんだ。だから、君以外に僕の師匠はいない」

「??コウ??」

「だから、これからもよろしく」

そこまで言い切つて、コウは妙な気恥しさに襲われた。

だが、リンゼが可笑しそうに笑うと、それも吹き飛んだ。

「ああ、分かった。不甲斐ない師匠だが、よろしく頼む」

「よろしく、師匠」

二人は、握手して爽やかに微笑んだ。

◇

すっかり暗くなつてしまつた夜道を帰路に着き、コウは自宅であるマンションに帰宅した。

鍵は開いており、電気もついている。なんらかの食べ物の匂いもする為、父親はもう帰宅しているのだろう。

コウの父は、家に居たり居なかつたりとまちまちであり、こうして帰つてくる日は、二人で晩御飯を食べる約束なのだ。

「父さん、ただいま」

「おう、お帰りコウ」

無さすぎるくらいに何も無いリビング。テレビとソファに、絨毯。そして、仏壇。

最近、父さん、また痩せたな。ほっそりとした父親を見て、コウは心配する気持ちを覚える。

「母さんも、ただ今つて言ってるぞ」

「ああ、うん。ただ今」

仏壇に抱き着いて宣う父の姿を見て、コウはすうつと何かが沈んでいくのを感じる。

「じゃあ、手洗いうがいしておいで。父さんは、ご飯の用意するから」
「うん」

そうして、キッチンに行く父親の姿を見送り、洗面所に向かう。手を洗い、うがいをして鏡を見る。

そして、そこに映る顔を見て、コウは苦笑せざるを得なかつた。
「はっ、ひつどい顔だね?」

顔を冷水で洗い、務めて普段通りを意識する。

父親は好きだ。それこそ、ミキヤリオとは違うベクトルであり、当たり前だがWayMarkの面々へ向ける友好とは違う。

血肉を分けた肉親へ向ける好意である。

それでも、駄目なのだ。コウは、今の父親を大手を振って好きとは言えない。

「??」
コウは、気分転換に頬を叩き、制服から着替える為に自室へ向かう。

「??」
無言で制服を脱ぎ、ハンガーにかけ、無難な私服に着替える。気まぐれに部屋を見回してみれば、十三歳という年頃の少女にしては、どう考えてもおおかしいと言える、無味乾燥、殺風景な部屋が広がっていた。

頭を振って、気を紛らわし、そんな部屋を後にする。

リビングに行けば、料理を並べ終わった父が椅子に座ってコウを待っていた。

定位置である向かい側の椅子に座って、手を合わせる。

「いただきます」

「召し上がれ」

そう言う父からは、慈愛のようなものが感じられた。そこは、母親と似たり寄ったりで心地好い。口に運んだ煮物は、優しい味がした。父親は、あの日からおかしくなったが、こうして料理をし始めたのは良いことだと思えた。実際、母の作るものをイメージしているからか、とても口に合う。

だが、そんな父親の行為の中でも、一つだけ許せないことがあった。

「はい、お母さん??あーん??」

「??っ!!」

「あ、おい! どうした!?!」

母親の遺影に食べさせるような仕草、そして食べ物を擦り付けられた遺影は汚れる。我に帰っていれば、こんなことはしないのだが、今日はこの日だったらしい。

コウは、するまいと誓っていた舌打ちをすると、晩御飯にほとんど手をつけずにリビングを後にし、自室に戻る。父親の困惑の声も聞こえなかった。

「??くそ??だから、嫌なんだ?!!」

コウは、苛立ちを感じながら、布団に入った。リビングからは、怒鳴り声と何かが割れる音が聞こえた。

今日は、寝てしまえそうな気がした。

◇

そして、深夜、コウは扉の前に誰かの気配を感じて目を覚ます。

「ああ、またか」そう呟いて、コウはもう一度目を瞑る。

父親の啜り泣く声と、悔いる謝罪の言葉が聞こえてきた。

「ごめん??ごめんよ??コウ??ユウ??こんな、お父さんでごめん??」

亡き母と、己の名を呼びながら、父親は泣いていた。

父は、母と己を重ねているのだ。確かに、薄明かりに照らされた部屋の写真立てに飾られる母と己の写真に映る二人は、瓜二つ、コウが成長した姿が母、想語ユウであり、母の幼い姿がコウそのものであった。

「お父さん、もっと、まともな人間に、二人に顔向け出来るような人間になるから?!」だから、僕を捨てないでくれ??お願いだ、ユウ??」

「僕は、母さんじゃないよ??父さん??」

謝罪を聞き届け、コウは、己の頬に雫が伝うのを感じた。

◇

翌日。父親はもう既に出立しており、家にはおらず、コウはラップのかけられた朝食を食べて、身支度をして家を出た。

そして、コウは、駅前でミキとリオの二人を待っていた。

今日は土曜日、二人とは前々からすき焼きを食べる約束をしていたのである。

時間を見ればちょうど待ち合わせ時刻。コウは、駅前の広場を見回すと、少し離れたところからこちらに駆け寄ってくる二人の人影が見えた。

「コウ!」

「お待たせ」

「ううん。全然待ってないよ」

事実、駅前に着いてから、まだ三分と経っていない。コウは、時間ピッタリよりも誤差程度に少し前に来るタイプであった。

「ささー！ いぎー！ 激安すぎ焼きに行かんー！」

楽しそうに笑い、歩き出したミキの姿に、コウは昨日の鬱々としてモヤモヤとした気持ちが晴れていくのを感じた。

第八話 憤り

「へえ、本当に安いんだ」

リオが、立て掛けられた看板を覗き込んで、感嘆の声を漏らした。三人前で三千円プラス税というのは、確かに安いだろう。しかも、かなり本格的である。

「でしよでしよー？ 私の情報網に抜かりなし！」

「ま、今回ばかりはミキの言う通りね。偉い偉い」

「えっへん」

リオに明るい茶色の髪の毛を撫ぜられて、気持ち良さそうに目を細めるミキ。リオがやめると、名残惜しそうにしたため、今度はコウが頭を撫でる。すると、また同じように目を細めて気持ち良さげにする。まるで猫みたいだ。コウは、そんな感想を抱いた。

「じゃ、いいいこー！ 予約も取ってるんだ！」

「へえ、予約まで??ミキ、本当にどうしたの？熱でもあるのかしら？」

「熱は無いよ！」

おでこに当てられた手を取り払い、頬を膨らませて抗議するミキ。

しかし、普段、コウの知っている栗林ミキという少女は、そのような事をするようなタイプではない。予約も取らず、アポ無しで突撃するような人間だ。

「??だって、この前のカラオケ行けなかったし??楽しみだったから、これで満席とかで入れなかつたら嫌だなって??」

「??ふふふ、ありがとうね、ミキ。ミキのそういうところ、私は大好きよ」

「ミキらしくって、そういうところ、僕も好きだな」

二人して微笑むと、ミキは元から少し赤らんでいた顔を、更に真っ赤にして、「う〜〜」と唸り始める。

「ごめんごめん。からかいすぎたわ。でも、本当にありがとうね、ミキ」

「??うん」

「じゃ、早速行こうか」

そう言つて、三人で店内に入ると、そこは和風でありながらモダン、女子だけでも問題なく入れるような温かな雰囲気広がっていた。

天井からは、『ようこそ、大平屋へ』の文字が吊るされていた。店内もかなり賑わいを見せている。やはり、売りにしている安さに釣られて、訪れたのだろう。家族連れや老人夫婦、男子の集まり的メンツや、コウ達と同じような女子生徒のみのグループも見掛けられた。

「案外、良い感じじゃない?」

「確かに。私もこれは予想外だったなあ」

「勧めた君がそれで良いのかい?」

舌を出して、てへへ、と笑うミキを見て、コウも微笑む。心地好きが、それだけが彼女達の間柄にあるものであった。

給仕の女性が現れ、予約の有無を問うと、ミキが前に出て、携帯の画面を見せる。

「はい、栗林様ですね。お席にご案内します」

「ありがとう」

「あ、ごめんなさい、この娘、こういう性格で?」

「ふふふ、いえいえ。良いお友達ですね。どうぞ、皆様水入らずでお寛ぎくださいませ」

ミキの元気の良さに対応出来るとは、この給仕の人、中々の手練と見た。変なことを考えている自覚はあったが、実際今日は変なのかもしれない。

コウは、給仕の女性に案内されて歩き出した二人の後に続きながら、店内を見回した。

「案外、落ち着いてるんだね?」

「そうね。すき焼きって言うくらいだから、騒いでる雰囲気の方が強かったんだけど?」

「まあ、その方がちようど良いんじゃないかな、とも思うけど」

すき焼きで騒ぐというのもおかしい話だ。

すき焼き、そう言えば二年くらい食べていないな。そんなことを考えながら、コウは案内された畳の部屋、座布団の上に座った。

「はあ、本格的ね。それであの値段って、大丈夫なのかしら?」

「まま、そんなこと気にしないで、食べよう！」

そう言うと、ミキは給仕の女性に簡易メニューを指さして、通常すき焼き三人前を注文する。女性は、注文を受け付けると、「ごゆっくりどうぞ」と言って部屋を後にした。

まだ昼でも少し寒い為、着てきていた上着を脱いで備え付けられたハンガーにかける。ミキとリオの分も受け取ると、コウは同じようにハンガーにかける。

「ありがとう」

「ありがとうさーん」

「どういたしまして」

そうして、もう一度コウが座布団に座ると、彼女達は誰からともなく話し始める。

その内容は、取り留めもないものばかりであった。コウは、女子中学生のするような世俗的会話には疎い方ではあったが、それでも、ミキやリオが噛み砕いて説明してくれるため、理解は示せた。そこは、やはり年頃の少女ではあるということだろう。

その中で、ミキは思い出したようにコウに話し掛ける。

「コウはさ、やっぱり凄いよね」

「え？ 何がだい？」

「ほら、入学してすぐ、二年のユウヒ先輩と仲良くなってたじゃない」
「?? ああ」

あれ以来、コウとユウヒは学校でそれなりの回数話し、それなりに交友を深めた。

だが、それがどうしたというのだろうか。ミキは、入学後すぐにその明るさと健気さ、可愛さから上級生と仲良くなっていたし、リオも水泳部関係で先輩と仲良く話している姿をコウは目撃していた。

「でも、別にミキとリオも先輩達と仲良いじゃないか」

「そりゃ?? まあ」

「もしかして、コウ?? ユウヒ先輩のこと知らないの？」

「え？」

コウは、話の展開についていくことができない。

リオは、今の様子から、知らないであろうコウに、彼女が知るユウヒについて語り始めた。

「ほら、先輩って好人??じゃない?」
「うん」

「好人では、あるんだけど、やっぱりそういう人って疎ましく思われがちなのよね」

「??疎ましく??」

その先に行く内容を、理解出来る。事実、疎ましさからだろう、己もそれを経験したことがある。その時は、怒りに身を任せたが、中学生にもなって、そんなことは出来ない。

コウは、己の内側から沸々とした怒りが湧き上がってくるのを感じた。理不尽への、怒りを。

楽しい時間が、台無しであった。リオは、その様子を知ってか知らずか、少し目を伏せながら続きを口にした。

「ユウヒ先輩ね、いじめを受けているみたいなの」

その言葉には、重みがある。

ユウヒという少女の現状を語るその言葉に、重みがないわけがなかった。

「??はっ、いじめ??か」

「それも、カースト上位。生徒会まで一緒にやっているとか??ないとか」
コウの様には、確かな嘲笑、嘲りがあった。

そういうことも、あるのだろう。意見の食い違いで、他者を排除するということは、案外普通のことだ。それを許せるわけではないが。だが、流れからして、そういうわけでもないらしい。単なる理不尽の所業なら、想語コウという少女が、それを黙認できるわけもない。

コウは、ため息を吐くと、意思の灯った眼を、ミキとリオの二人に向けた。

「??はあ??僕の力で、何とかしてみせよう」

「うん??私も、自分が通う学校がそんなんだなんて、嫌だもの」

「??コウなら、絶対に出来るよ。私、応援してる!」

ミキの言葉には、確かな信頼があった。

その言葉に、嘘偽りが無いこと、この二人は知っている。今までだって、それに助けられてきたのだから。

二人に対して、コウが頷いた。ちようどその時、扉が開き、先程の女性が大きな鍋を運んでくる。そして、机の真ん中に埋め込まれたコンロの上にそれを置くと、三人に注意を促して、コンロを点火した。「それでは、お召し上がりくださいませ」

三人からのありがとうございますという礼を受け取り、女性はすぐに部屋を去っていった。

コウは、先程までの重たかった空気が霧散したのを感じて、二人に話し掛ける。

「じゃ、辛気臭い話も辞めて。食べようか」

「うん！」

「そうね。と言っても、まだ出来上がらないけど?」

「待ち時間は、話でもして潰せば良いさ。そんなものだろう?」

「それもそうね」、そう言つて納得するリオを一瞥して、コウは指輪のない手元をチラリと確認した。

上着のポケットに入れているが、無いとどうにも落ち着かない。

「??コウ? 手元なんて見て、どしたの?」

「いや、なんでもないよ。ちよつと物寂しいなつて」

「?」

頭に疑問符を浮かべるミキがおかしく、笑いを零す。

当の本人は、さらに疑問符を浮かべた。

「もう??コウだったら、ミキをからかわないの。気持ちわかるけど、ね」

「二人してなんだよ! 私の何がおかしいの!」

「いや、ミキは私達にとつて居なくちゃいけない存在だよねつて、話しさ」

はぐらかされたと感じたミキは、頬を膨らませて二人からぷいと顔を逸らす。

コウは、苦笑しながら、グツグツと煮えるソレを菜箸で混ぜる。こ

ういったことは、いつもコウが率先してやるのだ。小学生の時には、付き添いに来ていたリオの母親が、「まるで、リオがお母さん、コウがお父さん、ミキが子供ね」と三人の様子を見て笑っていたことを、コウは覚えていた。

「ごめんごめん。さ、そろそろ出来たみたいだし、食べよう」
「??うん」

「ありがと、コウ。??いただきます」

やっぱり、こうして三人でいる時間が、何も気兼ねなくいられるのだと、コウは実感した。

三人で食べるすき焼きは美味しかった。

◇

「ふう??食べたね」

「そうね??私も、張り切って食べ過ぎたわ」

「お腹がいっぱいだよお」

「ミキは、一気に詰め込みすぎなのよ」

「あれは流石に苦しいよ」と言って、コウも微笑む。

ミキは、公園のベンチに座って、苦しそうにしている。いつものように、騒がしくする気力もないらしい。

「重症だね??じゃあ、もう少し休んで」

「もう少し休んでいく?」そこまで言い切る前に、三人の耳にサイレンの音が鳴り響いた。

そのすぐさま後に、人々の悲鳴が。遠くでは、アンノウンによるものであろう爆碎音やら地響きやらが鳴り始める。距離はそう離れていないらしい。

コウは、ミキに肩を貸して立ち上がらせると、遠くを見つめた。

「??悠長にしている暇は無さそうね」

「そうだね。結構近い」

「ええ、苦しいよ。アンノウン許すまじ??うぶっ」

「ほら、早く立って。逃げるわよ。コウも??って、あれ?」

辺りを見回せば、避難誘導をする自衛隊員と、万全の装備で地響き

や悲鳴、爆音の間こえる方角へと向かう自衛隊員の姿。だが、そこにコウの姿は無かった。

「ほんとに、命知らずだなあ?! もう」

「あの子は?! 全く。ミキ、コウへの苦言はまた後でにして、早く逃げましょ。コウは、大丈夫よ。また、見回りしてるだけに違いはないわ」

「?! うん」

心配そうに眉を下げるミキの手を取って、リオはシエルターの方角まで早歩きで歩き出した。

◇

その頃のコウと言えば、路地裏に走り込み、エクスカリバーを起動。そのまま、人目につかぬよう、全速力で走り出した。

そうして、コウが、現地に到着すると、そこでは、既にレンカがアミノハバキリを纏い、数体のアンノウンと戦闘を繰り広げている姿があった。

「コウ!」

「レンカ! 他の皆は?!」

「まだ来てねえぜ。こいつら結構強いぞ。Bレートから、Aレートになる直前くらいの強さはある」

Aレート。それは、コウがエクスカリバーを起動して見せたその日、彼女が倒したヴォーテイガンなどが属するレート。名持ちであるからには、それほど強さがあり、事実、あの時も、コウがパーフェクトセイヴァーギアの担い手でなければ、戦闘未経験者による討伐は不可能だっただろう。

「加勢する! はあっ!!」

『D A A A a a a a a?!?』

「ありがとよ、コウ! 『火刃』!!」
カッソ

エクスカリバーの刃が、異形の人型の足を切断する。地面に倒れたアンノウンを、レンカのセイヴァーギア、黒い刀身の太刀アミノハバキリが青い焰を纏い叩き斬る。焰に総体積の半分を消し炭にされたアンノウンは、苦悶の声を上げながら、粒子となって消失した。

レンカに加勢し、協力しながら、アンノウンを一体ずつ倒していく。

そうして、全てを倒し終わると、二人は安堵のため息を吐いて、辺りを見回した。

「もう、居ないかな??じゃあ『二人共！』そこからすぐに、品川まで向かってください!」??ッ!」

「四島^{しじま}さん! どうかしたのか!」

インカムから、若い女性の声が聞こえる。女性の名前は、四島^{しじま}亜希。WayMarkでは、コウもそれなりに顔を合わせたことがある。普段は、常に優しい笑みを浮かべるお淑やかな女性なのだが、そんな彼女の声には、コウ自身、聞いたことがないような焦りが含まれていた。

『品川区にて、Sレートアンノウン』『ゴルゴーン』の出現を感知!

現在、ユウヒさんが応戦中! カノンさんは、あちらの方でAレート含むアンノウン群と戦闘中である為、加勢は不可能! 貴方達が頼りです!』

Sレートアンノウン、それは、名を持つ者達の中でも、特別に強い力を持ったアンノウン。生まれながらの怪物であったり、生まれながらの悪性英雄など様々だが、その全てに共通して、恐ろしい程の強さを持つ。

「だが、こっから品川までつつたら、結構掛かるぞ!」

「間に合うかい?!」

Sレートアンノウンの出現、そして、それと一人で戦うユウヒの安否が気になった。だが、今すぐ駆けつけようにも、セイヴァーギアの力では飛ぶことが出来ないため、時間は必然的にかかる。

狼狽えながらも、取り敢えず建物の上を走って行こうと、低めの建物の上に跳んだところで、上空から二人へと声がかげられた。

「——案ずるな、二人共! こういう時こそ、大人の力を頼るもんだ! というより、戦場じゃあ、これくらいしかしてやれないからな!」

「司令ッ!」

「練宮さん！」

上空には、WayMarkのエンブレムの貼り付けられたヘリコプター。

WayMark司令官、練宮省吾が、はしご状のロープを下ろして、二人を見下ろしていた。

「良いぞ、出せ。全速力だ！」

「イエス、サー」

二人がヘリコプターに乗り込んだのを確認すると、省吾はパイロットに指示を出す。

そして、機内の椅子に座る二人を向き直る。

「ユウヒ少女には、頑張ってもらうしかない。二人も、すぐ戦えるように変身が解けないよう、闘志を燃やし続ける」

「つたりめーだ。後輩が、仲間がピンチだったのに、闘志が尽きるわけねえ。なあ、コウ！」

「ああ！」

「ふっ??頼もしいな。大人である私が、心配ばかりして??こんなザマではないけないな。二人共、頼んだぞ」

「応ッ！」「はいっ！」

省吾は、二人なら心配ないと判断し、開け放ったドアから顔を出して、ユウヒとSレートアンノウン『ゴルゴーン』が戦っているであろう方角を見詰めた。

その顔には、信頼と心配が混在していた。

第九話 ゴルゴーン戦

それなりの広さの河川敷。所々で草原が抉れ、土が露出していた。逃げ惑い、苦しむ人の形をした数十にも上る数の石が、辺りに散らばる血溜まりが、その河川敷を、まるで地獄絵図のように変えていた。そこに二つ、戦い、殺し合う影が。

『アアアアア!!』

「くっ、う??ッ!」

茜色の装甲を纏うセイヴァーズの少女、鏑木ユウヒは苦悶に顔を歪める。

髪の毛の全てが蛇であり、翼を持ち、その下半身は馬のそれである伝承通りの見た目のアンノウン、Sレートアンノウン『ゴルゴーン』と対峙する中で、幾度となく攻撃を受け止めた鎧はヒビが入っていた。

このアンノウン、ゴルゴーン自体の戦闘力は大したことがない。ユウヒ単体で倒せる相手ではないが、誰かが援護してくれば二人でも倒せるだろう。

しかし、その特徴から割り振られた名前。その持つ伝承のせいで、彼女はゴルゴーンと顔を合わせることが出来ないのだ。だからこそ、ユウヒはゴルゴーンに大したダメージを与えられずに、ほとんど一方的に嬲られている。

「くっ??直視さえできれば??」

『死ネ! 滅べ! 救済者ア!!』

「がは??っ!」

全長5メートルは超えるであろう巨体、その後ろ足から繰り出される蹴りを腹に受け、ユウヒは地面を転がりながら拳を地面に突き刺して踏み留まる。

「??くっ??きつついなあ」

『ユウヒさん! そろそろ、レンカさんとコウさんが到着します!』

もう少しだけ、耐えてください!』
「??いくらでも、耐え続けてみせるよ??!」

だが、その言葉とは裏腹に、ユウヒの身体は、今にも倒れそうであった。

ユウヒは、腹部からの激痛に顔を歪めて、呻き声を上げる。そんな状態のセイヴァーズに手加減をするほど、アンノウンは甘くはない。「うっ??」

『斃レエ!!』

ゴルゴーンが、翼でユウヒを薙ぎ払う。

大質量の直撃を受けたユウヒは、そのまま地面に叩きつけられ、衝撃で肺の空気を全て、微量の血液を口腔から吐き出す。

「かはっ??」

『コレデエ、終ワリダア!!』

ゴルゴーンの手刀がユウヒの腹部を貫こうと迫った瞬間、二人の間に何かが着地し突き刺さった。

それは、一本の剣。金色に輝く刀身を持った、聖剣の一振り。

直後、頭上からの危険を察知したゴルゴーンは、四足で以てその場から飛び退く。

「??想語コウ、推参!」

「コウちゃん!」

「お待たせ、ユウヒ」

危険の正体。それは、赤のマントをはためかせ、ゴルゴーンのいた地面に右の正拳突きを見舞うコウであった。コウは、そのまま左手でエクスカリバーの柄を握ると、振り抜くように一閃。ゴルゴーンの下半身を、小さくも斬り裂いた。

そんな二人に、先制しようとゴルゴーンが襲い掛かる。しかし、それは、青い焰の斬撃によって止められた。

「はアっ!! くらえッ 『火焰』!!」

『グウツ?!?! ??小賢シイ、小娘ガア!!』

「はっ! 言ってる、Sレート!」

ゴルゴーンの髪の毛、数匹の蛇が現れたレンカに襲いかかる。

レンカは、それらをアメノハバキリで軽く斬り捨て、ゴルゴーンに剣先を向けた。

「行くぞ！ コウ、ユウヒ、背中は任せた!!」

「ああ、任せてくれ」

「了解！」

コウの肩を借りて、何とか立ち上がったユウヒは、短剣デュランダールを空中に召喚し、拳を握り締めて構える。

その姿を見て、まだ大丈夫かと判断したコウは、己もエクスカリバーを両手で構えて、ゴルゴーンの脚部を見据えた。

『小娘ドモガア!!』

「はっ！ いちいち、うるせえんだよっ!!」

全員、ゴルゴーンの顔だけを見ないようにはしているものの、それぞれが瞬時に対応する場所を決めて、攻勢に出る。

アメノハバキリの刃が、ゴルゴーンの腹部を斬り裂き、エクスカリバーの閃きがゴルゴーンの脚部、関節を狙い、二人への翼や蛇での攻撃をユウヒの指示で射出されたデュランダールが阻害する。

レンカは、ニヤリと笑った。

「くくっ、良い感じのコンビネーションじゃねえか！ リンゼが抜けてどうなることかと思ったが、問題は無さそうだな！」

「僕も、意味無くエクスカリバーを引き継いだわけじゃないからね！」

『小娘ガア、凶ニ乗ルナア!!』

ゴルゴーンの蛇から放たれた紫色のガスが、レンカとコウを襲う。全く予想していなかったゴルゴーンのアクションに、二人は虚を突かれる。どうにかして回避しようとするが、遅い。

このままでは殺られる、二人がそう思った瞬間、赤の閃光がガスを呑み込んだ。

「『デッド・バースト』!!」

『新手カッ!?!』

それは、赤いローブを身にまとった少女。

三人にとって、特にユウヒとレンカにとっては、よく知っている人物である。

「カノン！ おせえじやねえか！」

「アンノウンきつと倒して、栃木から、ここまで最短ルートを全力で走ってきたんだけど？」

栃木から品川区までは130キロメートル前後ある。それを、走つてくるというのは相当だろう。

「ま、何はともあれ、心強いぜ。四人なら、こいつも仕留められるかもなッ！」

「当たり前。こんな蛇女、きつさと倒して私は帰りたい」

『ッ!! 死ニ晒セエ!!』

激昂したゴルゴーンが、レンカとカノンに向けて四足で駆け出す。その速さは、初動から時速200キロにも及ぶ。

突撃とほぼ同時に二人に接近したゴルゴーンは、前足でレンカを、後ろ足でカノンを蹴ろうとする。

「あめえんだよッ！」

「馬鹿にしないで」

しかし、レンカはそれをアメノハバキリで受け流し、カノンはダインスレイブの腹で受け止めつつ、衝撃を少しずついなした。

「——『フアントムキル』」

「くらえよ、反撃の拳イ!!」

——『火砲』!!』

突如地面より現れた彼岸花、その一本一本が人の腕へと変化して、ゴルゴーンの脚部拘束する。

そこへ、蒼く燃え盛る、焰を纏ったレンカの右拳。剣から大鎌へと変化した、カノンのダインスレイブの一撃が放たれた。

ゴルゴーンの身体が、蒼き炎で燃え上がり、ダインスレイブによつて右翼と右腕が切り落とされる。

「今が好機、かな?!」

「みたいだね！」

それを見て、好機と判断したコウとユウヒの二人は、それぞれのギアを構えて、ゴルゴーンを見据える。

エクスカリバーの刀身が、二つに割れ、赤い閃光が刀身の付け根へ

と。ユウヒの指示で、数十本にも及ぶデュランダルが虚空へと召喚された。

『エクス・バースト』オ!!」

『デュランダル、シユート! ?? 『デュラン・カーネイジ』ツ!!』

エクスカリバーから解き放たれた赤き閃光がゴルゴーンの左半身を呑み込み、射出され突き刺さった幾数ものデュランダルが、その刀身を増殖させてゴルゴーンの身体を突き破る。

苦悶の声を上げる間もなく、ゴルゴーンは身体中から粒子を漏らしながら、膝を付いて沈黙した。

それを見て、四人は警戒を払いながらも構えを解いて、集まる。

『??ふう』

「Sレートアンノウンも、案外大したことない」

「コンビネーションアタック、成功! ??ってやつだね!」

「ま、初の四人共同戦線にしちゃあ、よくやれた方なんじゃねえの?」

四人のセイヴァーズは、口々にゴルゴーンとの戦いへの感想を言い合う。

「私達の中でも一番長く戦ってきたリンゼちゃんやんが戦えなくなっちゃって、コウちゃんが戦うってことになって??でも、心配する必要なかったね! この感じなら、私たち、もつとたくさんの人を救えるよ!」

「確かに、この調子でやれるなら、アンノウンとの戦いも楽そう」

『??僕も、頑張るよ』

ユウヒの言葉にうんうんと頷くレンカ。カノンも、それは考えていたようで、肯定の意を示す。

コウはコウで、そこまで言われたら、もつと頑張るしかないと考えて拳を握り締めた。

事実、レンカやユウヒの言う通り、今回の戦いが初めての、現状WayMark所属セイヴァーズ四人による共同戦線であった。そして、損害はあったものの、誰一人かけることなく討伐出来たのは、僥倖であつたのだろう。

それが、油断を招きさえしなければ、の話ではあるが。

『??ッ!!』

「ッ!? 危ない、ユウヒー」

「へ?」

沈黙していたはずのゴルゴーンが、突如目を見開いた。丁度、その対角線上にいたユウヒは、いち早く気がついたコウの注意喚起も虚しく、ゴルゴーンと顔を合わせてしまう。

『顔ヲ??合ワセタナア?』

「まず??ッ!」

ユウヒが慌てて顔を伏せようとするも、固定されているかのように身体が動かない。遅かったのだ。

ゴルゴーンの赤い眼が妖しく光り、ユウヒのセイヴァーギアが一瞬、眩く輝いて、変身が解ける。

セイヴァーギアに備わる、致死の攻撃を受けた時、残存レジエンダリーエナジーのその全てを防御に回す機能。これによって、並大抵の攻撃でセイヴァーズが死ぬことは無い。しかし、これが発動した場合、セイヴァーギアはレジエンダリーエナジーを喪失し、再充填されるまではギアを纏うことは出来なくなる。必然的に、セイヴァーギアによる変身も解かれるのだ。

鎧が砕け散る衝撃によって、ユウヒは意識を失ってしまう。コウは、一目散にユウヒの元へと駆け寄り、安否を確かめる。

「ユウヒッ!」

息はしている。気を失っているだけであり、目を覚ますだろう。だが、それが分かったところで、状況が好転するわけではない。むしろ、頭数が一つ減った分、かなりの無理を強いられることになる。

ほくそ笑むゴルゴーンを睨み付け、レンカはアメノハバキリを構えた。

「クソっ! まだ生きてやがったか!」

「想語さん、鏑木さんを連れて『誰も逃ガシハシナイ!!』??難しいか??」

ゴルゴーンの身体、失われた両翼と両腕が、粒子をまき散らしなが

ら再生される。

ユウヒを連れて逃げるように指示を出そうとするも、ゴルゴーンの
手刀による一撃がカノンの言葉を遮る。何とか、飛び退くことで避けるが、掠った一撃がローブの裾を引き裂く。

ゴルゴーンは誰一人として逃がすつもりは無いらしい。

「僕も、戦うよ??全員で、生きてアイツを倒すんだ??!」

勇ましく宣言するコウ。

レンカは、それに応えるように笑い、カノンもダーインスレイブを構えた。

『先程マデノ「ゴルゴーン」トハ違ウトシレ、小娘共!!』

「ぐうっ!?!」

その言葉の通り、先程までとは繊細さを欠くものの、その一撃一撃は、比にならないほどに重たく鋭くなった。

いなせていたはずの攻撃が、重たすぎていなせなくなったことに歯噛みして、レンカは回避に徹する。

コウとカノンも、どうにかして援護に入ろうとするが、容易に切り落とせていたはずが、刃すら通らなくなった蛇によつて邪魔をされる。

「??やられてばっかじゃ、ねえんだよ!!」

イライラを募らせたレンカが、アメノハバキリの持ち手を握り込むと、刃から青炎が噴出する。

「くらえ、『火刃』!!」

『ソナナ温イ一撃、効カヌア!!斃レ、セイヴァー!!』

「ぐうあっ!!」

火刃による一撃すら、ゴルゴーンの表皮の一部を軽く焦がすだけで終わり、その返しの前足による蹴りを受け、強く蹴り飛ばされたレンカは、河川敷の硬い土の地面に打ち付けられ、数度弾んで止まった。

「レンカツ!?!」

「想語さん！ 才原さんを心配している場合ではないです！ あの人は、強い人だから！ この程度で、死にはしない！」

「??カノン??」

カノンの言葉に、レンカへの心配を一旦頭の片隅に置ける程度に冷静になったコウは、エクスカリバーを構えて、考える。

それを見て、カノンはコウにある提案をする。

「??想語さん、私のデッド・バーストに合わせて、エクスカリバーの一撃を解き放ってください」

「??わかった」

未だほぼ無傷の状態のゴルゴーン。それを見詰め、コウはエクスカリバーを、いつでもエクス・バーストが放てるように起動状態にする。

そして、カノンは、ダーインスレイブを地面に突き刺して、赤い眼を見開いた。

「『フアントムキル』！」

『無駄ダト言ウノガ、分カラナイノカ、小娘エ！』

先程と同じく、人間の腕に変貌した彼岸花がゴルゴーンの全身に絡みつく。そして、鎌に変化した緋色の剣が、ゴルゴーンに振り下ろされる途中で、刀身が二つに分かれた状態のダーインスレイブに戻る。

「キャンセル!! 『デッド・バースト』 オ!!」

「?? 『エクス・バースト』 ツ!!」

解き放たれた二つの赤い奔流が、虚を突かれた様子^のゴルゴーンを呑み込み、その後ろにある川の一部をも消し飛ばした。

「やった??」

煙が晴れたそこに、ゴルゴーンの姿はない。

安堵から、コウがため息を吐く。コウの鎧も、カノンのローブも、色合いがくすんでしまっている。後、もう一度でも必殺技を放てば、エナジーが空になるだろう。

差し込んだ夕日が、辺りを照らす。

カノンは、荒くなった息を整えてから、レンカの方に向かう。

コウも、気絶するユウヒの様子を確認しに行こうとし、異変を感知して、弾かれたようにユウヒの元へと走った。

「——間に合えッ!!」

『馬鹿メガ??マズハ、一人ツ!!』

ユウヒに覆いかぶさるように巨大な影が照らし出される。

次の瞬間、ユウヒと無傷のゴルゴーンとの間に割り込んだコウの腹部を、ゴルゴーンの手刀が穿いた。

『僥倖??マズハ貴様ガ死ネエ!!』

「うあああああ!?!」

鎧が碎け散り、致死量の出血液が辺りに撒き散らされる。輝きを失った空色の鎧片、破り裂かれた赤いマント。折れる聖剣。

そこで、コウの意識は途切れた。

第十話 呵責

Way Markの医務室を、重たい空気が包み込む。

時刻は、夜の十時過ぎ。

ゴルゴーンとの戦いの後、レンカ、コウ、ユウヒの三人はすぐにWay Markの医務室へと運び込まれたのだ。

リンゼと、比較的軽傷であったレンカ、省吾の三人は暗い面持ちで、医師の話に耳を傾けていた。カノンは、両親が心配するため、早い段階で帰宅した。

「鑄木さんは、大丈夫です。直に目を覚ますでしょう。??ですが、想語さんは??」

目を伏せがちに言葉を紡ぐ医者の様子からして、芳しくないことだけは分かった。

未だカプセル状の手術室に入り治療を受けているが、その治療は難航している。何より、コウ自身の身体が弱い。生来からの虚弱体質であり、最近はそのも多少はマシになったという記述があったが、このような負傷をした時、それがアテになるかといえば、答えは否。

血液量も元から少なく、気を抜くことが出来ない危ない状態がずっと続いていった。

それでも、コウと過ごした時間は少ないが、レンカは、コウがどういう人間なのかを、ほとんど感覚的に理解していた。

「??そんなこと、あるかよ?! アイツはなあ、どう考えたって、こんなところで死ぬヤワなやつじゃねえんだよ?!」

「??レンカ少女、まだ、コウ少女が死んだとは言っていない」

「ッ! ??ッ??そうだけだよ?!」

落ち着き払った様子の省吾に掴みかかろうとするレンカであったが、省吾の握り締めた拳に赤が見えたことで、思い留まり冷静さを取り戻す。

事実、大人であり、少女達を戦場に送り出すだけの立場である省吾本人こそが、この現状において、最も己の無力を恥じ、悔いている存在なのだ。

「??すまない。席を外す」

「ああ」

「どこ行くんだよ、リンゼ??」

その問いに、リンゼは答えない。

医務室を後にするリンゼの後ろ姿を見て、レンカは一抹の不安と寂しさを覚えた。

そんな時である。

「ん??」

「ユウヒ！」

「榊原医療班長??見てやってくれ」

榊原と呼ばれた黒髪をストレートに伸ばした女性——本名を榊原さかきばら涼リョウと言う——医療班の班長である彼女が、目を覚ましたユウヒを軽く診察する。

「ユウヒさん、分かりますか?」

「さかき??ばら??さん?」

「はい、榊原です。意識は大丈夫みたいですね」

「あの??あて??一体、どうしちよった??ううん、何があつたんですか?」

標準語に言い直し、涼に現状を尋ねる。すると、涼が今に至るまでの過程を説明する。ユウヒは、一応の納得をした。

周りには、省吾やレンカが居ることから、心配させていたのだと理解すると、ユウヒはベッドの上で上体を起こして二人に頭を下げる。

「私が、油断したばかりに??ごめん」

「いや、オレは大したことねえよ」

「私の方こそ、ユウヒ少女を危険に晒してしまったこと、申し訳なく思う」

「いえ、練宮司令が謝ることじゃ??あれ、カノンちゃんとコウちゃんは?」

姿が見えない二人について、レンカと省吾に聞くユウヒ。

しかし、二人は顔を伏せてしまう。そして、省吾が決意したような顔でユウヒを見つめて口を開いた。

「??カノン少女は、親御さんも心配するだろうから、もう既に帰した。彼女はほとんどダメージを受けていないからな」

「はあ??. あの、コウちゃんは?」

「??まず、落ち着いて聞いてくれ。君は悪くない。悪いのは、そう。全て、私たち大人だ」

「?!?」

その言葉に動揺するユウヒ。省吾は、畳み掛けるように口を開いた。こういう事は、さっさと教えてしまった方が良い。ユウヒなら、今まで通り落ち着いて受け止めてくれるだろうと、そう判断してしまった省吾は、コウの現状について語った。

「??コウ少女は、ゴルゴーンに腹部を穿かれた影響で、生死の境を彷徨っている。それこそ、今日が峠。超えられなければ、死ぬだろう」

「嘘??嘘、ですよね?」

「嘘ではない。私も、そんなこと、嘘だと思いたいが??生憎と、事実なんだ」

省吾の言葉に、嘘偽りが無いということ、ユウヒは理解出来てしまった。これ程までに真剣な表情をしているこの男の姿を、ユウヒは過去に一度だけ、見たことがある。その時も、自分が??。

理解して、逡巡した後。ユウヒの顔から、色が抜け落ちた。

ユウヒは、胸から下げたチェーンに付けた銀色のリングを、無意識の内に握り締める。

「??私のせいだ??私の??また、私はあ??ッ!!」

「てめえのせいじゃねえ。てめえもコウも、誰一人として悪かねえんだよ」

「だけど??! 私が油断さえしなければ??ッ!」

何を言われても、自責の念が収まることは無かった。それほどまでに強い、己の無力への憎悪。それは、少女から、涙として形となり溢れ出た。

聞き分けのない。これ以上の対話は意味も無し。判断したレンカは、医務室を後にした。

「??君も、帰りなさい。大事を取って、明日は自室でゆっくりと休むん

だ。いいね?」

「??はい」

頷いたユウヒの顔は、省吾からは窺い知ることが出来なかった。

◇

「??はあ」

翌日、ユウヒは己の住む義浦高校に備え付けられた寮にほど近い公園で、ベンチに座りぼうつとしていた。

空は曇り、雨でも降り出しそうだ。それもまた一層、彼女の気持ちに影を落としていた。

「どうして??こうなっちゃうかなあ?」

思い出すのは、昨日のこと。己のせいではないと、省吾もレンカも言っではいたが、あれは確実に己の油断が招いたことであった。

胸から下げる形見を見詰める。

思い出すのは、己の目の前で弾け飛んだ恩人の姿。今でも、夢に見る。

被るのだ。コウの姿が、その人物と。

「??はあ」

自然とため息が零れてしまう。

セイヴァーズとなったその日から、己は世界を守る為の防人となった。そう自負して、全てを受け止める努力をしてきた。

ユウヒにとって、セイヴァーギアを使うというのは、己の命をすり減らしてでも、力無き人々を守る為の行為であり、その重さは簡単には測ることが出来ない。

いつもなら、こうして再認識することで決意を固められたのだが、今回はそうもいかないらしい。

憂鬱と、弱い己への呆れから、自嘲して微笑んだ。

そんな時、彼女に声をかける人物が現れる。

「ユウヒ、さん??ですよ?」

「??ああ、君達はコウちゃんのお友達??だよ?」

それは、暗い面持ちの三橋リオと、俯いた栗林ミキの二人組。

コウと出会ってから一週間近くになるユウヒは、二人を知ってい

た。

「私に、何か用、かな?」

「??あの、コウなんですけど?」

「?!?」

リオの口から出た、最も予想できたコウの名前に、ユウヒは目に見えて顔色を変える。

予想できたことだと言うのに、情けない限りだ。ユウヒは、自らの体たらくに情けなさを覚えながらも、リオに話の続きを促す。

「昨日から連絡が取れなくて??ユウヒさんなら、知ってるんじゃないかって、ミキが?」

「??いや、知らない。昨日は、一日中部屋に居たから??力になれなくてごめん」

リオの暗かった面持ちに、さらに影が差した。

一言、「ごめんなさい、ありがとうございます」とだけ言うと、リオはその場から立ち去ってしまう。その後を追うようにミキも歩き出した。

そして、ユウヒとのすれ違いざまに、終始無言であったミキは口を開く。

「——??人殺しの嘘つき、コウが死んだら、ただじゃおかないからね」

「??ツ!」

ゾツとするような、寒気を煽るような声音。

その表情は、彼女が時折見かけた時の明るい天真爛漫なものではなく、この世のありとあらゆる憎悪を宿したような、そんな顔であった。それだけ言うと、ミキは、リオが去っていった方へと走っていった。

「??ごめんなさい??ごめんなさい」

一人、取り残されたユウヒは、ただただ、降り出した雨に打たれながら、虚空に謝ることしか出来なかった。

◇

同時刻、司令室。

日曜日である為か、比較的人の少ない司令室で、省吾とレンカは資料の映し出されたスクリーンテーブルを挟んで、対面していた。

「呼び出してすまないな、レンカ少女。リンゼ少女が来たら、話を始めよう」

「ああ、気にしないでくれ、司令。オレも、この今をどうにかしたくてうずうずしてたんだ」

レンカの顔からは、隠しようのない闘志が見えた。いや、むき出しである。それだけ、昨日の出来事は屈辱であり、晴らさなければならぬ雪辱なのだ。

「そういや、コウはどうしたんだよ。親とかにも連絡とか??」

「ああ、それはこちらでやっておいた。一応、自己という形で父親とも連絡が出来た」

「はっ??」
「たたく、親にすら事情を明かせねえってのは相当だよな。黒すぎるんじゃないか、こーこー」

「最もだな」
「そうやって、省吾は苦笑した。」

事実、WayMark及び国家特務機関対特殊指定災害アンノウン対策課についての情報は、所属する者以外には、例えどんな情報であろうとも漏らすことは出来ない。それが、所属する者の親族であろうと、その秘匿性に例外はない。

その様から、『国家特務機関の最深部』と呼ばれることもある。それこそが、少女達の所属する組織の実情なのだ。

「宮野リンゼ、到着しました」

「ああ、急に呼び出してすまない。母親との、それは、大丈夫だったか?」

「ええ。世界を救うのに、あの人との下らない関わりはどうでも良いことなのです」

言い切るリンゼに、「そういうことではないのだが」と、苦言を零そうとして省吾は止めた。

申し訳なきもあるが、今は、そのようなことに時間を割いている暇はないのだ。

「昨日、君達が相対したSレートアンノウンゴルゴーンについて、聞かせて欲しい」

「良いぜ。どんなことを聞きたい？ 全部答えてやらあ」

ゴルゴーン。今や、WayMarkの因縁の相手とも呼べるだろう、傷跡を残した存在。

省吾は、現状この場において、それについて最も知っているレンカに問う。

「アレは、自然発生だと思うか？」

「??いや、確実に違うな。意図的に出されたやつだ。コウに致命傷を負わせた後、何かに怯えて、すぐに俺達の前から姿を眩ませたからな。どうして怯えていたのかはわからねえが、あれは、何かに指図されたに違いない」

その言葉の意味するところは、特殊指定災害という位置付けであったアンノウンが、何者か、それも人間によって操られているということにほかならない。

省吾は、二人にある写真を見せる。

「これは？」

「??これは、識別指名手配ヒューマノイド、コードJと呼ばれる少女だ」

「??これが、例のソロモンの指輪を強奪した犯人??ですか」

「ああ」

それは、茶髪の少女。黒いローブに身を包み、黒い指輪ソロモンの指輪を意のままに操るこの少女こそが、今回の件に参与していると、省吾は確証を持っていた。

「先日も、我々の精鋭が彼女を捕らえようと出動し、尽く殺されていた。生身では勝てない。だから、レンカ少女には彼女の対応をお願いしたい」

「別に良いけどよ??流石に、人間相手に殺しはやらねえぞ?」

「当たり前だ。そのようなこと、私が絶対にさせはしない」

省吾の言葉に、「なら良いけどよ」と言っつて、レンカは省吾を見つめた。

「??だけだよ、こいつに当たりはついてんのか? いくら、国家特務機関だからつて、全世界の人間を把握出来るわけじゃねえんだろ?」

「それについては問題ない」

言い切る省吾に首を傾げて疑問符を浮かべるレンカ。どういふことかと、リンゼは問い質した。

「??栗林ミキ」

「?」

「コウ少女の身辺を確認していた時に確認した少女だ」

省吾の口から出たのは、コウの唯一無二の友人の名前。

省吾は、驚愕の事実を口にする。

「この少女から、コードJと同一の声帯及び身体情報を得た」

「それつて??」

栗林ミキから、コードJと同じ情報が入手できた。それが意味するところは、ただ一つ。

「栗林ミキこそが、コードJであり、この事件の黒幕である。そういう事だ」

「??そんなのつて、ありかよ」

「私も、こういう事は起きて欲しくないと思つてはいた。だが、これは紛うことなき事実であり、彼女は人類の敵だ」

司令室に、重たい空気が広がつた。

だが、沈黙を続けていられるほど、時間に余裕はない。

「??そこで、リンゼ少女には、彼女の尾行を頼みたい。まだ、確証が、証拠がない。これは、栗林ミキの為であり、未だ生死の境を彷徨うコウ少女の為でもあるのだ」

「??私が、ですか?」

「ああ。本当なら、このようなことこそ、我々がやるべき事なのだが??
もう既に我々の顔は割れている。さらに言えば、私が直々に鍛えた君
だからこそ、こういうった類の任務に向いていると、我々は判断した。
断ってくれても構わない。我々は君の意思を尊重しよう」

頭を下げた省吾に、リンゼは逡巡する様子を見せ、そして決意を固
めて省吾を見据える。

「私が、やります。彼女の為にも、コウの為にも」
「??感謝する」

深く、深く頭を下げた省吾。

リンゼは、迷いを払うため、拳を握った。

第十一話 悩み

どれだけ歩いたか。

雨に濡れながら、ゆったりとした足取りで、ユウヒは道を歩いていった。ただ、目的地も無く、歩きたかった。考え事に耽りたかった。ただ、それだけ。

『コウちゃんは大丈夫だろうか』『これから先、どうやって学校で生きていけば良いだろうか』『実家の経営は大丈夫だろうか』『こんな自分が、生きていても良いのか』

自分の油断のせいで、今も生死の境を彷徨っている想語コウという少女。明るく、良識的かつ後腐れない性格で、人たらしというのはあいうタイプなんだろうなど、直感的に理解出来た。

そんな彼女と過ごしたのは、ほんの少しだけだったが、それでもその関わりあいは思い出と呼んでも差し支えない。

何を大袈裟など笑われるかもしれないが、今と対比して、彼女との語らひは輝いていた。

そして、今まさにそれは失われようとしている。

それは、自らの責任にほかならなかった。

学校では、いじめを受けていた。

どうして、そのようなことをされるのか。理由は思い浮かばないが、同級生の彼女達、その中でも生徒会の一人である少女が、私を指さして『生意気だから』と宣った時は、納得は出来なくても理解は出来た。だから、私はいじめを受けているんだろう。

殴る蹴るなどの暴力はない。だが、入学当初は良くしてくれていたクラスメイト達も、最近では冷たくなった。それに、ものが無くなったりというのも横行している。正直いって、辛かった。

だけど、それは全て、己の不注意。自業自得なのだと思えば、まだ笑顔を作れた。

実家である高知で両親の営んでいる定食屋についても、心配であった。

幼い自分に、心配をかけまいと振る舞う両親であったが、それでも

子供目からしても、経営が苦しそうなのは目に見えていた。仕送りも必要十分以上は断って、WayMarkから支給されている相当な額の給料のようなものを、仕送りしようかとも考えた。だが、怪しまれるのは不味い。国家との制約で、WayMarkやセイヴアーズ関連について話すことは出来ないのだ。バイトと言う事も難しい。使いだのないお金だけが貯まるが、それを誰かのためには使えなかった。こんな自分が、生きていても良いのか。

それが、ユウヒの脳内で、今までも幾度となく繰り返されてきた問い。だが、その問いは、毎回、あの人の代わりとなつて世界を救う為に生き続けるという、そんな答えで無視してきた。

だが、今回はそうもいかない気がした。

もう、心が納得出来ないのだ。

ユウヒは、取り留めもなく頭の中を駆け巡るだけの考えや心配事を、今は、ただただ煩わしく思いながら、見覚えのある一軒家の前に立って、歩みを止めた。いつも、こうして思い耽りながら、歩いているとここに辿り着く。

「また、来ちゃったな??迷惑じゃなかといけんぞ?」

ユウヒは、インターホンを押すと、ため息を吐きながら応答を待った。

すると、ドタドタという音が扉の向こうから聞こえ、次いでゆつくりと扉が開かれる。

「こんにちは??十村さん」

「あら、ユウヒちゃん??どうして傘を差していないの!? と、とにかく、中にお入り」

出迎えた老婆は、雨に濡れて俯くユウヒを見て驚き、ユウヒを家の中に招いた。

この老婆の名前は、十村紗栄子^{とむらサエコ}。少し、いや、かなりユウヒと関係の深い人物。

木造の和風建築な家の中に案内される。これまでも、好意に継るように何度か訪れたことがある。ユウヒにとっては、東京に来てから、寮部屋と司令室の次には訪れた場所だ。

「これで、髪の毛拭いて、あとお着替えも??あの子のは??駄目よね??
じゃあ、私のお古で??」

「べ、別に??」

あの子、その言葉にユウヒが表情を強ばらせたのを見て、紗栄子は
自らの部屋に向かい、古めかしい服をいくつか持ってきた。

「じゃあ、これに着替えて。洋服も洗濯してあげるから」

「い、いえ??服は良いで「何言ってるの、風邪ひいちゃうでしょ? 好
意には甘えるものよ。ほら、早く」??はい」

ユウヒは、彼女のこの言葉に弱かった。

どんな苦しみも自分の中に収めて、誰にも甘えず、自分の力で生き
る。そんなことを考えていたとしても、甘えてしまう。

そうして、紗栄子がユウヒから受け取った服を洗濯機に入れて戻つ
てくると、ユウヒを居間の畳に置かれた座布団に座らせて、お茶を注
いだ。

遠慮がちに受け取ったそれを一口含むと、冷えていた体が温まるよ
うであった。

「??それで?どうかしたの、ユウヒちゃん」

「??話しても、良いんですか?」

伏せ目がちなユウヒの質問に、優しく微笑むと、紗栄子は口を開く。

「多方、Way Markさんとか、アンノウンとか??セイヴァーズのこ
と、でしょ?」

「??はい」

「あの子が死んでから、もう一年と少し経つけど、こんなに塞いでる貴
女は久しぶりよ。話してごらんさい」

ユウヒは、ここ一週間の出来事を、語り始める。

それは、新しく入ってきた少女のことから始まり、小さな出来事か
ら、昨日のSレートアンノウンのこと。そして、それによつて傷を
負ってしまったその少女のことまで、難しいことは噛み砕いて、全て
を事細かに語った。

「??なるほど、ねえ??通りで、ユウヒちゃんがこんなにも落ち込んでい
るわけだわ」

「??」

俯いて震えるその姿は、罰を待つ罪人のようであり、怯える少女そのものであった。

この老婆は、知っていた。

自らを影から身を張って守ってくれるセイヴァーズと呼ばれる存在が、彼女達のような未だ幼くいたいだけで、弱くか細い少女達ではないということ。

何より、自らの孫がそうであった、この老婆は、司令室の面々を含めた中でも、誰よりもそれを理解しているだろう。

「??ユウヒちゃん、太陽が出てきたら、彼処、行きましようか」
「??」

あの日から毎日、欠かすことなく出向くあの場所。紗栄子は、いつもユウヒが来る度に、彼女をそこに誘っていた。

ユウヒは、その誘いに小さく頷いた。

◇

ふわりと浮かび上がるような感覚に晒されて、コウは目を開いた。視界に入ったのは、淡く虹色に蠢く世界。

「もしかして、死んだ?」

『死んでなんて、いないわ』

コウの質問に答えるように現れた女性のシルエット。コウは、それに言い様のない懐かしさを覚えた。

『だけどね、コウ。もう少し頑張らないと、貴女は死んでしまうの』

「僕が、死ぬのか。でも、ユウヒを助けられたんだ。誰かを庇って死ぬなら、僕の命も捨てたものじゃ」

捨てたものじゃない、そこまで言おうとして、コウの言葉は遮られた。シルエットが、コウの唇に人差し指を当てて、その先を止めたのだ。

『駄目。まだ、彼女は救われていないわ』

「え?」

『だって、ほら。彼女は、苦しみを抱えたまま。ミキちゃんだって、そう』

「ミキも?」

女性の言葉に合わせて、コウの目の前には、雨に濡れながら俯くコウヒの姿や、リオに背中を摩られて嗚咽を漏らすミキの姿が浮かんだ。

コウは、理解が追い付かず、膝について項垂れた。

「どう、して?」

『どうして? お母さん、それも分からないような子供に育てた覚えはないんだけど?』

「だって、母さん? 僕は、死ぬまで命を張ったんだよ? それでも、まだ救うのに、足りないの?」

『ええそう。貴女一人の命を張ったところで、問題を先延ばしにするか、新しい問題を生み出すくらいしか出来ないの』

その言葉は、深く、コウの胸を穿いた。

まるで、ゴルゴーンの手刀のように。

コウの胸へと、鋭さで痛みを伴わずに空虚な穴を開けた。

『だからね、コウ。貴女は、もう少しあとのことも考えなさい。貴女の救済は、まだまだ終わっていないのよ。ええ、それこそ、始まったばかりなの』

「??まだ始まったばかり??」

その言葉は、ストンと、コウの中に収まった。

まるで、その言葉こそが真理であったとでも言うかのように。

「??ああ、なら、戻るとするよ」

そして、この想語コウという少女は、それを受け入れてしまう。

何故なら、救うことこそが、想語コウという少女の存在意義であり、与えられた呪いなのだから。

『そう。なら、これを持っていきなさい』

「これは?」

『これは、私の??アーサー王の使っていたもの。持ち主を不死にする時まで言われる遺物。壊れてしまっているから、不死にする程ではないけれど、今の貴女には必要なもの』

シルエットが差し出したのは、皮と鉄で出来た何か。壊れてしまっ

ていて、使えそうにも無いが、それでも、力を感じることが出来た。
「行つてきます、母さん」

『ええ、行つてらっしゃい。お母さん、応援してるわ』
その言葉と共に、コウの視界を光が包み込んだ。

◇

今日も、医務室に訪れていたリンゼと省吾。

見詰めるのは、目を瞑ったまま横たわる少女の姿。

「??コウ??」

「う??う??」

「ッ!? 榊原さん!」

コウの様子を注視していたリンゼは、初めて呻き声を上げたコウを確認して、傍で控えてモニターをチェックしていた涼に声をかけた。

涼は、コウの様子を確認し、モニターをもう一度チェックして、目を見開く。

「コウさん、バイタル戻りました!」

「何っ!?!」

「皆に連絡を入れてくる」

コウのバイタルが回復した。その言葉に、省吾は驚きと喜びを隠せなかった。

リンゼは立ち上がり、コウが死を免れたことを他の面々に伝えようと、デスクの上に置いてあった携帯を引っ掴んで、医務室を出た。

ほぼ同時に、榊原がさらに驚きの声を上げる。

「それと、今この場に、源物Originの反応を確認しました! 波形観測、アーサー王の鞘! コウさんの中からです!」

「何だ?!」

普通、セイヴァーギアの素材である遺物、源物は、遺跡などから発掘されることがしばしばあるが、誰かの体内から確認されるということは前例が少ない。それも、その前例というのは持ち主の子孫であったり縁者の子孫であったりと、少なくとも関係性があるはずなのだ。

だが、想語コウは、その血筋ではない。アーサー王の血筋、王家に名を連ねる者ではないと、断言する。

だからこそ、これは珍しいことであるのだ。

「??史上初の、三つ目を持つオリジンホルダー??」

「それも、まさか立て続けに同じ人物に縁のある物を持つなんて??」

そうして、立て続けの驚愕の事実の驚きのやまない二人は、さらに驚愕することになる。

ベッドに横たわるコウの顔を覗き込んでいた榊原の眼と、空色の眼が、その視線を交じ合わせる。

「??あ??れ??」

「お、起きてても大丈夫なのか!?!」

「そ、そんなはず?! 嘘っ?! 傷が、全部癒えてる!?!」

二人は、今日何度目かの驚愕に目を見開く。榊原がチラリと貫頭衣を捲ると、痛々しく残っていた傷が、跡形もなく消えているではないか。

「??これが、不死の鞆の力??」

「??あの、僕の服は、ありますか?」

「あ、ああ」

ベッドに腰掛けたコウが、省吾に問い掛ける。

省吾は、デスクの上に畳んであったコウの服を取ると、コウに渡す。

受け取ったコウは、すぐさま着替え始めようとして、榊原に止められた。

「コ、コウさん! 司令がいるのに、なんで着替え始めてるんですか!?!」

「時間が惜しい??着替えさせてください」

コウの眼から、揺るぎない意志を感じ取った榊原は、説得するのを諦め、ため息を吐いた。

こういうタイプが、セイヴァーズになりやすいんだろうな。そんなことを、考えながら、榊原は省吾の方を向く。

「??もう。司令、少し出ていてください」

「お、おう」

退室を促された省吾は、おずおずと医務室を後にする。

コウは、榊原に礼を行って着替えを再開した。

「行っても良いですけど、絶対に無理はしないこと。どういふ訳か血

も戻ってるみたいだけど、絶対に無理をしないこと」

「分かってる。別に、戦いはしないよ」

「それなら良かった」そう言って優しく微笑んだ榊原に、もう一度、今度は心配してくれたことについて一言礼を告げる。

そうして、着替えを急いだ。

第十二話 十村アオイという少女

「じゃあ、ちょっと準備してくるから??お掃除してもらえるかしら?」

「はい」

雨が止み、太陽が出て。

紗栄子と、乾いた私服に着替えたユウヒの二人は、目的地であった場所に辿り着いていた。

そこは、墓。それも、奇妙なことに、どの墓石にも名前が刻まれていない。

木桶に水を汲み、紗栄子に一旦別れを告げて、ゆっくりと歩き出す。「??政府専用の墓??か。死んだら、私もここに埋葬されるのかな??」

ユウヒは、そう一人ごちると、目的の墓石の前で止まる。他と同じように名前のない墓石。誰が埋まっているのか、知っている人以外には絶対に分からない。いや、この下に何も埋まっていないことを、ほとんどの人は知らない。それを言えば、この墓にある墓石のほとんどには、下に何も埋まっていないのだが。

そこには、花やささやかなお供え物があった。前に来た時も、ここには花とお供え物があった。その前もだ。

自分が死んだら、こうはならないだろうな、と。ユウヒは自嘲したように微笑む。

「??ん?」

その時、お供え物の中に、手紙があることに気がついた彼女は、心の中で謝りながら、興味本位でそれを取った。

「あれ?。なんで、私宛?」

封をされた手紙の裏側には、『鏑木ユウヒ様へ』の文字があった。

多方、彼女を慕う誰かの手紙だと思ったのだが、思わぬ物に、ユウヒは目を丸くする。

また、ユウヒは知らず知らずの内に、首から下げたリング、光を灯さぬセイヴァーギアを握った。

「??読むだけなら??」

ユウヒは、素早く丁寧に墓の掃除を終わらせると、もう一度、手紙と対面する。

ゴクリと、唾を飲む音が聞こえた。この手紙を開いたら、戻ること出来ない、そう直感が囁くのだ。

そうして、ユウヒは封を解いて手紙を読み始めた

◇◇

一年前のあの日、鏑木ユウヒは、上京してから必要になった道具などを買い揃えるために、近場のショッピングモールを訪れていた。

一人、道が分かるわけでもなく、勝手も知らない。

そんな彼女に、すぐさま手を差し伸べたのが、ユウヒにとっての運命の人。

十七歳、高校二年生の少女にして、WayMarkの第四号セイヴアーズである、十村アオイであった。

「大丈夫ですか？」

「あ、はい??あ、いえ、やっぱり大丈夫じゃなかと??大丈夫じゃないです」

なれない標準語に四苦八苦し、しどろもどろになりながら、なんとか助けを求めたユウヒ。アオイは、ユウヒの頼みを、一も二もなく快く引き受けた。

ショッピングモールを歩きながら、目当てのものを買って歩きながら、道中で、ユウヒが気になった店などについて質問すれば、事情を説明したアオイは、笑顔で教えてくれた。

「あの、ここは??」

「あ、もしかして知らない? ここね、東京だと結構有名なんだけど??」

東京に来たばかりで、正しく右も左も分からないような状態であったユウヒからすれば、アオイは軽く東京を知り尽くした東京マスター

のような存在になっていた。地方民、ここに極まれり、である。

そうして、二人でショッピングモールを回ることに、数時間。買い物を終え、それなりに打ち解けられた二人は、アオイおすすめのモダンな木造のカフェで、温かい飲み物を飲みながら談笑していた。

「へえ、高知じゃそういうのが人気なんだ」

「うん。他にもね、家族連れでのイベント、お祭りとか?」

話しを続けようとして、家族、という言葉に表情を曇らせたアオイを見て、どうしてか、話しを続けることが出来なくなる。

その辛そうな顔を、何とかしてあげたくて。ユウヒは、いらぬお節介だと思いつつ、アオイに問い掛ける。

「何かあったの?」

「え? ??あ、いや、別に?。ユウヒには、関係ないこと、だよ??うん」はぐらかそうとして、しどろもどろになりながら、アオイは心配をかけまいと振る舞う。だが、その姿は、彼女よりも四つ年下である少女から見ても、不自然で痛々しく、苦しそうなものであった。

「??私じゃ、受け止められないかな?」

アオイの視線と、ユウヒの視線が交じ合う。ユウヒの眼には、誰かを、今ならば、アオイを助けたいという強い意志が。アオイの眼には驚きと苦しみ、そして、同族を見るような、そんな感情が混ざりあっていた。

諦めたようにアオイは、ぽつぽつと言葉を紡ぎ出す。

「私さ、アンノウンにね」

「うん」

苦しそうな彼女が、押し潰されて話を止めないように、ユウヒは相槌を打ちながら、彼女の話に真摯に聞く姿勢をとった。

だが、その次に話された情報は、予想が出来ていたとはいえず、ユウヒの決意を揺らがせる程には、やはり大きいものであった。

「お父さんと、お母さんを奪われたの。去年」

「??うん」

「今は、おばあちゃんと暮らしてるけど??やっぱり辛い」

「??うん」

「お母さんや、お父さんに会いたいよ。こんなこと、出会って一日のユウヒに言うのもなんだけど、もう誰でも良い。私、寂しさに死にそうなの?!?!」

声が上擦るアオイ。その声音には、確かな寂しさが含まれていた。そんなアオイの姿を見て、境遇を聞いて、ユウヒは。その眼から雫を垂らした。

そんなユウヒの姿を見て、アオイは、涙を溜めた眼を驚きに見開く。その拍子に、目尻から涙が溢れたが、そんなことは気にならなかった。ただ、目の前で己よりも先に涙を流した、この少女に、その理由を聞いたかったのだ。

「どう??して??」

「だって??そんなの、悲し過ぎるよ」

「??悲し、い??」

ユウヒの答えに呆然とするも、その胸には、自然と温かさが宿っていた。

決意したように、ユウヒは顔を上げ、アオイを見据える。

「??決めた。私ね、アオイちゃんのお父さんとかお母さんみたいにはなれないけど。だけど、アオイちゃんの寂しさを紛らわせることくらいは出来ると思うんだ。だから、私??」

言葉を一旦切って、ユウヒは、悠然と口を開く。

「私、アオイちゃんと——お友達になりたい」

「ユウヒ??」

その申し出は、アオイを、アオイの鬱々としてやり場のない気持ち、吹き飛ばした。確かに、そう感じた。

気が付けば、アオイは、首を縦に振っていた。

この日、アオイとユウヒは、一日限りの『友達』となった。

それからの二人は、少しの間だけとはいえ、シヨツピングモールの

ゲームセンターや、屋上にある小さな遊園地で遊んだ。

それは、ユウヒとアオイに想い出を作った。

本音を話し、結果として友達を得たアオイにとってすれば、それは掛け替えのない時間であり、あの日から常に共にあった空虚さ、苦しみを忘れさせた。

そうして、そんな想い出を胸に、二人でショッピングモールから帰ろうとしたところで、その時は訪れた。

「??アンノウン警報??」

けたたましく鳴り響く、サイレンの音。そして、シエルターへの避難誘導。阿鼻叫喚で、我先にと逃げ出そうとする周囲の人々。

場所は、ここ、二人が想い出を作ったショッピングモールであった。

「アオイちゃん、私達も避難しよう」

「??ユウヒ??」

ユウヒは、アオイの手を掴んで、シエルターの方角まで避難しようとする。

しかし、その手を掴み走ろうとしても、アオイは一向にそちらへ動く気配を見せない。

それどころか、騒ぎの大きい方角。アンノウンが出現したのである方へと歩きだそうとしていた。

「早く逃げようよ??」

「??大丈夫。私は死なないよ。ちょっとやらなきやいけないことがあるの。だから、ユウヒは先にシエルターに避難してて」

「どうして?!?! 逃げないと、死んじゃうんだよ?!」

ユウヒの悲痛な訴えは、しかし、決意を固めたアオイには届かない。「大丈夫だって。私、これでも力があるんだ。だから、私は死なないの」

「力って??」

訳が分からない。そんなユウヒの問いに、アオイは、ふふふと微笑んでユウヒを見詰めた。

そして、幸せそうに、それを口にする。

「友達がいる。それだけで、私は死なないの」
「え？」

今度こそ、訳が分からなかった。

だけど、納得はしてしまった。なら、大丈夫だろう。そう思えてしまったのだから、ユウヒは、引き下がるしかなかった。

「絶対に、また逢いに来てよ!!」

「もちろん！ 無事でいてくれたらね！」

ユウヒに背を向けて、アオイは駆け出す。

駆け出したアオイの後ろ姿をしばらく見つめてから、ユウヒもシエルターの方へと走り出した。

そして、ユウヒが、ショッピングモールからほど近いシエルターに逃げ込んでから、もう一時間弱が経った。

アオイは、未だにユウヒの前に姿を現さない。シエルターから出る許可が出ていない、空は即ち、未だにアンノウンがいるということ。

「アオイちゃん??遅いなあ」

心配はしていた。だけど、あそこまで言い切ったアオイが死ぬとは思えなかった。

それでも、最悪の可能性は常にある。居ても立つてもいられなくなったユウヒは、警備員にトイレに行くことを伝えて、そつとシエルターから抜け出した。

ショッピングモールの方からは、爆音や破碎音が絶えず聞こえてくる。

考えてみれば、こうやって警報が出ている時に外に出たのは初めての経験であった。

「??アオイちゃんは何処だろう?」

アオイと別れた場所に来て、ユウヒはアンノウンが近いことを悟っていた。いや、正確にはその光景が見えていた。

だが、様子がおかしい。

触手を持った異形のアンノウンが、何かと戦っている様なのだ。

そして、そこから少し場所を移して、その全貌を把握しようとした時、ユウヒは見てしまった。

「アオイ??ちゃん?」

目を疑った。

黒いインナースーツの上から、黄色に煌めく小さな鎧を纏い、その手に細長い何か、槍のようなものを持った少女。

その顔には、見覚えがあった。いや、見覚えがありすぎた。

何故なら、東京に来てからの初めての友達であり、先程別れたはずの十村アオイその人だったのだから。

『J A A A a!!』

「甘いよっ!」

そのアオイが、槍で以て、人類の天敵と教わったアンノウンを相手に戦いを繰り広げていた。

何が何だか分からなかったが、それでも、アンノウンが苦しげなことは雰囲気で分かった。

そうやって、アンノウンを翻弄する姿は、まるでテレビで見たヒーローさながらであり、そして、ユウヒはアンノウンと戦うヒーローへと、自然とエールを送った。

いや、送ってしまった。

「頑張れ! アオイちゃん!!」

「ツ!」

『j A A A ? j A A A a A A A a a!!』

アンノウンは、今、最も殺しやすい対象であるユウヒへと、その殺

意の矛先を向ける。

アオイと対峙させていた触手のその全てをユウヒへと差し向け、ユウヒを殺さんとする

「不味っー!」

驚愕と焦りに顔を染めたアオイが、ユウヒとアンノウンの方へと手を伸ばし、駆ける。

ユウヒは、自分に矛先を向けて襲い掛かるアンノウンに怯え、動くことが出来ない。

——絶対に、殺させはしない。

そう思えば、アオイは、文字通り己の命すら、捨てられる気がした。いや、捨てることが出来た。

インカムからの制止の声すら無視して、アオイは、今この瞬間において、ユウヒを救うことが出来る、ただ一つの力を起動させた。

「間に合えッ!! ——セイヴァーギア、モード『コモンセイヴ』ッ!!」

それを唱えた時、アオイの鎧が一層強く輝きを放ち、そして急速に収束。

リング状に戻ったセイヴァーギアから、レジエンダリーエナジーが溢れ出し、アオイの全身を覆い尽くす。

「ああああ!!」

そして、ユウヒと触手の間に立って、その手を触手に向ける。

アオイの身体を覆っていたレジエンダリーエナジーが、薄く、強い障壁となつてアオイとユウヒ、否、ユウヒを護った。

「??アオイ??ちゃん?」

「馬鹿。本当に馬鹿。なんで、来ちゃったの?」

「だって??心配で??」

ユウヒを、叱責するアオイ。その瞳からは、涙が溢れ、その言葉には慈しみが感じられた。

「私を心配してくれたのに、怒れるわけない??もう、馬鹿あ!」
「ごめん??ごめんね??」

「謝るな！ 私が、絶対にユウヒを護る！」

少女達は、涙を流す。

それは、命が散る間際の、儂い夢。

そして、夢は、終わるもの。

「??もうダメか??」

「え?」

「ううん、なんでもないよ。大丈夫。絶対に、護るから」

そう言つて、アオイは、リングにもう片方の手をかぎして、叫んだ。

「私の命??全部、持っていけ！」

それに呼応するように、一層、リングの輝きが増した。

同時に、アオイの口から、血液が漏れ出る。

『j A A A j a A A A A A A A A A A!!!』

なかなか死なない二人に痺れを切らしたアンノウンが、さらに苛烈を極めて攻撃を続ける。

障壁にヒビが入る。これ以上長くはもたないことは、ユウヒにも分かった。

「友達は、殺させない！ 殺すなら、私だけにしろ!!」
叫ぶ。

死にたくはない。だけど、友達が死ぬのは、もつと嫌だ。だから、殺すなら、私を。

そして、その通りに、十村アオイという少女は、その命を燃やし尽くした。

「ありがとう、ユウヒ。私ね、もう、十分幸——」

「アオイちゃんっ!?!」

その瞳から流れた、涙も、想いさえも。

視界いっぱい赤となって広がった。そこに、彼女の想いを感じることは、どうしてかできてしまった。幸せだと、彼女は言った。その想いに、嘘偽りはなかった。

己の足元に転がってきた、黄色い光を放つ銀の指輪を、拾う。
紅に染まった、己と、彼女の来ていた服。それらを見て、ユウヒは握り締めたリングから浮かび上がる、否、魂からの怒りと悲しみによって浮かび上がったその詠唱を、叫んだ。

「――Fragment Misteltein Start―
p!!!」

そうして、一人のセイヴァー^少女が死に、新たなセイヴァー^少女が生まれた。



あのあとのことは臆気にしか覚えていない。怒りにとらわれ、力が溢れてきた。そうして、気が付けば、アンノウンは消滅し、血に濡れた自分だけが残った。

その時から、ミストルティンは反応しない。

ユウヒは、その手紙を読みながら、溢れる涙を抑えることが出来なかった。

「そっか、私、忘れてたんだ」

第十三話 急展

「あら、その手紙は？」

「あ、いえ??」

紗栄子が手続きを済ませて墓石の前まで来ると、そこには、涙を流して手紙を見詰めるユウヒの姿があった。

「??なるほどね。あの子の手紙??あの子らしいわ」
「？」

一人納得した紗栄子の様子に疑問符を浮かべるユウヒを他所に、紗栄子は優しく微笑んで、手提げの中からお供え物を取り出して、墓に供えていく。

ユウヒは、慌てて手伝おうとして、手紙をそつと墓の上に置こうとする。だが、紗栄子は、それをやんわりと手で制した。

「て、手伝」

「いいの。貴女は、その手紙を大事にして」

そう言われてしまったのは、ユウヒも引き下がるしか無かった。

何より、手紙を読んで、忘れていた何かを思い出した余韻に、不躰ながらも浸っていたかった。

すると、紗栄子がお供え物を取り出す中、徐に口を開く。

「??私ね、最初は、貴女のこと、ほんの少し、ほんの少しだけ恨めしかったの」

「??」

悲しげに、自嘲するようにそう言う紗栄子は、本当にその時の己を嘲っているらしかった。

だけれども。ユウヒは、それを咎めることも、何かを言うことすらも出来はしない。

「息子と、その嫁を失って、アオイを引き取って。二人の遺産と私の年金で、大事に育ててきた」

「??っ」

泣き出しそうだった。

俯いて肩を震わせる紗栄子だけではない。ユウヒも、心がはち切れ

そんな想いに、目尻に涙を溜めていた。

「そんなアオイを奪った貴女を、怨み、憎々しい貴女を、私は、どうしてか許せてしまった。なんでだと思おう？」

「??わかりま??せん」

分からない。その言葉に、偽りはなかった。本当に、分からないのだ。

自分は、恨まれ、憎まれるようなことをしこそすれ、彼女から許しを得られるような、そんなことをした覚えはなかった。いや、出来なかった。

混乱し、呼吸が荒くなるユウヒを落ち着かせるように。紗栄子は、ユウヒの頭を撫でながら、己の胸の内を語る。

その声音と、撫でる手からは、慈しみが感じられた。

「??だけどね。毎日の様に家にまで来て、泣きながら謝って、夜になっても謝り続ける貴女を見て、次第に、私が一番、どうしようもなく憎まれるような奴なんじゃないかって、そう思ったの」

「どうしてですか?!」だって??「ううん。事実、そうなんだと思うわ」

ユウヒの抗議を遮って、紗栄子は涙を零しながら、しかし悠然と語り続けた。

「??アオイの気持ちも分かってやれないで、あの子を孤独にして??そんなアオイが「護りたい」、「死んででも救いたい」って思えるような、そんな素敵なお友達に、苦しい思いをさせ続けた。醜い人間よね、私??」

「そんな??」

紗栄子の、有無を言わせない雰囲気、その先を紡ぐことが出来ない。

悪いのは、あの時、彼女の足手纏いになった自分なのであって、自分が罵られ蔑まれこそすれ、貴女が自責の念に駆られる必要は無い。

だが、それを言おうとすれば、多分、紗栄子はそれを否定するのだろう。そんな確信があった。

「貴女は、背負い込み過ぎる人間よ。だけどね。全部が全部、貴女が悪いというわけじゃない」

「そんなこと??ないですよ??」

なんとか否定するユウヒの頭を抱く紗栄子。

突然のことに、目を開き、驚きを露わにするも、次の瞬間、紗栄子がかけた言葉に、ユウヒは膝をつくこととなる。

「もう、良いのよ。貴女は、十分背負った。貴女だけが苦しむ必要なんて、無いの。だって、貴女は、私の、私達の??何より、アオイの――

――
救済者セイヴァーなんだから」

その言葉に、ユウヒは、もう己の涙を抑えることが出来なかった。

「うっ??うう??うあああ!!」

「よく、頑張ったわ。偉い。偉いわよ、ユウヒちゃん??だから、もう溜め込まなくて、良いの」

嗚咽を漏らしながら、声を上げて泣く。こうして、誰かの胸を借りて、吐き出すように泣いたのは、久しぶりのことだった。

紗栄子は、抱くユウヒの背中を摩りながら、声をかけ続けた。

◇

そんなユウヒと紗栄子の様子を見守るようにして、私服に身を包んだ少女、コウは、墓の入り口に立っていた。

「??僕の力は、必要無いみたい??だね」

ユウヒが、その心が救われたことに嬉しさを覚える反面、自分の手で救うことが出来なかったことに、複雑な気持ちを抱いてしまう。

そんな醜い己を叱責するように、コウは両の手のひらで頬を叩くと、その場を後にしようとする。

自分には、まだ救うべき人が居た。今のユウヒなら、己がどうこうする必要も無いだろう。そう考えてのことだった。

そんな時だった。

そうして歩きだそうとして、コウは墓石の陰に人影を見つける。その人影は、何かをぶつぶつと呟いて、二人の様子を眺めているようであった。

「??やっぱ、私にこんな役目は無理かな??いや、んな事僕には分からないけど??あの人に頼まれたことだし??」

「??君、どうしたんだい?」

「ッ!? 貴様は、少女K!」

突然話し掛けてきたことに動転してか、慌てふためきながらコウを指さす白髪混じりの紅い長髪の少女。黒い右目と、カラーコンタクトであろうか、黄色い左目の、左右違う色合いがコウを正面から見詰める。

少女Kとは、どういうことか。Kというのは、コウのアルファベット綴りから取っているのか。そんなことを考えながら、もう一度、件の少女に意識を向け、そして、今度はコウが驚きに目を開いた。

「何処に、行ったんだ?」

目を逸らしたのはほんの一瞬であった。しかし、そこに先程までの少女の姿はない。

コウは、首を傾げながらも、辺りを見回して、少女の姿が無いことを確かめると、仕方なしと判断。当初の予定通り、その場を後にした。

◇

コウが起きてすぐに出て行ったことに一時、騒然となったWaymark司令室であったが、彼女から事情を聞いていた榊原涼からの説明により、今ではいつも通りとなっていた。

司令官である省吾は、手元の書類を眺めながらコーヒを飲んでいった。

その書類とは、現状、ソロモンの指輪を奪取しその力を振り翳しているときれる、指名手配ヒューマノイド、コードJこと、栗林ミキの情報 that 記されているもの。今は、リンゼに頼んで尾行をしてもらっているが、大した動きは無いという旨の連絡しか入ってきていない。

何かが、省吾の胸につつかえていた。何かが、おかしいのだ。

この少女が、WayMarkが誇る気鋭のエージェントの尽くを、なんの躊躇いもなく殺すことが出来るようには思えなかった。

それだけではない。

情報を見れば見るほど、彼女とコードJが似つかなくなるのだ。

これでは、まるで彼女を意のままに操る誰かが居るかのようで??。

そうして、省吾は、一人考えに耽っていた。

そんな司令室の全てのモニターに、アンノウンの出現を示すWAR NINGの赤い文字が表示される。

冷や汗を流し、忠尚が省吾に報告。省吾は、資料を傍らに置いて、指しを出し始める。

「アンノウン、出現を感知しました!」

「何処だ!」

「場所、中国、江西省です!」

中国、ということは、アジア支部であるWayMarkの管轄であった。

日本でない、ということは、今回の黒幕は関係ない可能性が高い。

省吾は、手早く考え、考察をまとめると、今動いてくれるであろうセイヴァーズを頭に浮かべた。

「??ユウヒ少女は??今は、駄目だな。コウ少女も、ここで止めてやるわけにはいかない。??ここは、レンカ少女に頼むとしよう。連絡を頼む」

「了解です」

頷くと、忠尚が亜希に目配せをする。彼女は、コンソールを操作し、すぐさまレンカに繋いだ。

幸いなことに、レンカは基地の近くにいた為、すぐに基地に向かうとだけ言って彼女は電話を切る。

「??どう動く、コードJ?!いや、ミキ少女?!」

省吾は、少女の顔を脳裏に浮かべ、その行動を待った。



件の少女、栗林ミキはといえば、三橋リオを伴って人気のないカフェの外に設置された椅子に座り、コーヒーを片手に休憩をしている

た。

「??ミキ、どうしたの?」

「リオ??コウは、生きていると、思うよね?」

ミキからのその質問に、リオは「当然よ」と答えて、やや温くなったコーヒーを啜った。

二人は、昨日から連絡が取れず、行方も知れない親友を探して、街中を歩き回っていた。

そうして、歩き回ること数時間。彼女らはめぼしい手がかりを手に入れることも出来ず、こうしてカフェで休憩するに至った、というわけである。

「コウが、そう簡単に死ぬような子に思う?」

「??ううん」

「そう。だから、私達が疑つちや駄目」

リオの言葉は、少なからずミキの心を揺すった。親友であるはずの自分が、コウが生きていることを疑うなど、やってはいけないことだ。親友と言うからには、コウが見つかるその時まで、彼女を信じ続けなければいけないだろう。少なくとも、二人はそう思っていた。

「??なら、コウもリオも私が殺させない??。私が?」

「え??」

ミキは、そう言うと、リオの口元に布を当てる。不意を突かれたり才は、驚きに目を見開き、そして、意識を失ってしまった。

何らかの睡眠薬の類か。渡された物の効果に懐疑心を抱きながらも、そつとリオを長椅子に寝かせて、ミキは立ち上がる。

「??起動せよ、ソロモンの指輪??我が命に従い、悪鬼神仏を我が手中に??」

ミキの右手、人差し指に嵌められた黒いリングが、妖しく輝く。

すると、彼女の目の前に、数十体のアンノウンと、それらとは一線を画す雰囲気を纏った二体のアンノウンが召喚された。

「ゴルゴーン、アメミット。汝らを、今解き放たん?」

『アアアアアア!!』

『殺ス?殺ス殺ス!!』

先日、セイヴァーズを襲い三人を戦闘不能にまで追い込んだ蛇の髪の毛を持つSレートアンノウン、『ゴルゴーン』。そして、ワニの頭部にライオンの上半身、まるで鎧を纏っているかのような下半身を持つた異形のアンノウン、Sレートに分類される『アメミット』は、呪詛を吐き出しながら、怨嗟の炎を燃やしながら、大地を踏みしめた。

「さあ、行け！想語コウ以外のセイヴァーズを、全て始末しろ！」

『アアア!! アアアア!!』

『待ッテイロ、セイヴァーズ!!』

午後五時の鐘が、鳴り響く。それは、何かを暗示しているようで??。そうして、解き放たれた者達は、突然の事態に逃げ惑う人々を殺しながら、進軍を開始した。

「??不味いな」

そして、その一部始終を目撃していた黒髪黒目の少女、宮野リンゼは、この事態をどうにかするべく、司令室への道を急いだ。

◇

「??了解しました」

『悪いな』

「いえ。これも、セイヴァーズとしての責務なので」

そこまで言うと、カノンは、電話を切る。そして、黄色い眼を瞬きさせて、目の前の装置を見上げた。

「??テレポーター??本当に作動するのかな?」

「大丈夫です。ちゃんと作動することは確認済み。安心して、アンノウンを倒してきてください」

カノンの隣でキーボードを叩いて作業をしていた作業員の一人が、カノンに安心するような笑みを浮かべる。

「これは、WayMark本部にあるような、アジア全域に送ることが出来るテレポーターとは違って、WayMark本部のみにしか転送できない。だけど、その分、短時間で再使用可能になるので。君も、すぐにこっちまで帰ってこられますから」

「帰りは心配してないですけど??分かりました。転送、始めてください」

溜息を吐いて、瞑目したカノンに了承の意を示し、作業員は、テレポーターを起動させた。それと同時に、テレポーターが重機械が作動するような音を響かせ始める。

「聞いてるとは思いますけど、対象は、大田区、目黒区、品川区、港区、世田谷区を襲うアンノウン群です。その中には、この前貴女達が対峙したゴルゴーンを含む二体のSレートが混ざっています。正直言って、レンカちゃんも欠けている今だと、少し不安ではあるけど?」「いえ、私が殺ります。??それくらいしか、私に出来ることは無いから??」

「??本当に、ありがとうございます。貴女達に、僕達の全てをにかけているようで??情けない限りです」

カノンは、顔を伏せた作業員に「そんなことないですよ」と微笑みかけ、そして、テレポーターが発する光に目を瞑った。

「??アンノウンを殺して、みんなに必要とされる??絶対には?!!」

複雑な感情を孕んだその言葉は、誰にも聞かれることはなかった。

第十四話 対峙する。

「はああ!! 死ねえ!!」

『dAAA!?!』

赤い剣閃が、アンノウンを容易く屠る。瓦礫や血溜まりがそこかしこに見られる住宅街。先程まで、そこを埋めつくしていたアンノウンは、今ので全てが消滅した。

事も無げにそれを為した本人、カノンは、赤のローブを翻しながら、次の目的地へと向かう為にその場から跳躍。着地と同時にまた跳躍を繰り返し、時に地面を疾駆して移動を開始した。

『カノン少女、次の目的地には、Sレートアンノウンが一体アメモットがいる。カノン少女の力だけで倒せるかは難しいところだが、一人でSレートを討伐することも、セイヴァーギアなら前例がある! 理論上は可能、そういうことだ。記録を打ち破る気持ちでやってやれ! 君ならできる、健闘を祈る!』

『??はい!』

省吾の激励を受けて、カノンはその速度を一段階引き上げた。

そもそも、やるやらないかで言えば、やる以外に選択肢のない今回。レンカは中国で発生したアンノウンを討伐する為、中国までテレポーター。コウとユウヒも司令室へと向かっているらしいが、それでもまだ到着はしていない。なればこそ、今戦える自分が、アンノウンを討伐すれば良い。誰かに必要としてもらうためにセイヴァーズとなったのだ。

だから、カノンは、相手が何であろうと引き下がることは元から頭に無い。

『くれぐれも無理はするなよ!』

「分かっています?!」

省吾の心配の声に、小さく苦笑を零す。

そして、遠くに見える硝煙を視界に収め、風に乗る怒号と悲鳴を聞き届けた。自然と鋭くなった視線が、鰐の顔で吠える巨大なライオンもどきを捉える。

昨日の今日で、Sレートとの連戦だが、文句などは無かった。

だが、ゴルゴーンにすら、今の彼女では、同じセイヴァーズ四人がかりでも勝つことが出来なかったことは、それなり以上に彼女の不安を煽っていたのも事実である。それは、偏に彼女が弱かつただけではなく、全員のチームワークの欠如や、一人一人の弱さが原因ではあった。とはいえ、彼女からすれば、アンノウンの強さなどは問題では無いのだが。

彼女が戦うのは、一言に言ってしまうえば、自分の為であった。誰かの為に己を張り、誰かに必要とされること。誰かに認められること。そうすることで、彼女の承認欲求は満たされ、自己満足に浸れる。

彼女自身、誰かを救いたいという気持ちに嘘はなくとも、セイヴァーズとしてアンノウンを屠るのは、それが道の一つであるからに過ぎず。愛する何かを守るためではなく、愛してほしいから戦うのだ。

その態度は、言ってしまうえば偽善であるし、彼女も、それを理解していた。

だとしても、欲望の方が強いのは人の性。抗い難いソレが、彼女をセイヴァーズとして戦場に立たせる。どれだけ、戦うことを恐れても、欲が首をもたげれば、天秤は傾いてしまうもの。

彼女達セイヴァーズは、人々を、ひいては世界を守るという大役を任されてはいるが、一人の人間の少女でしかないのだから。

『カノン少女、アメミットが君を捕捉した！ 最悪、他のメンバーが来るまで、耐えてく「私が、倒してみせます」カノン少女!?!』

『アアアアア!!』

憎き救済者を認めた、複合した異形の者が吠える。

その怨嗟の咆哮に晒されながら、しかして、カノンはキツと目を見開いて、割け、閃光を迸らせるダーインスレイブを振るった。

呼応するかのように、アメミットも飛びかかり??

『アアア!!』

『『デッド・バースト』ツ!!』

偽善の救済者と、魂の裁定者の戦いが、ここに始まった。

◇

「??ユウヒちゃん??行くのね」

「はい。私は、十分過ぎる程に、力をもらってました。それが、分かったから。私は、戦います??!」

心配を眼に浮かべる紗栄子を見据え、ユウヒは決意で以て、彼女の良心を退けた。

それは、拒絶ではない。

ただ、必要が無いのだ。

セイヴァーズとして、また戦える。まだ、拳を握ることが出来る。故に、その良心は、今の彼女には必要のないものであると、そういうことである。

「私、この役目から、目を背けない。私なりの本音で、向き合ってみよう、そう思うんです!」

「そう。なら、私から言うことは、もう無いわ。貴女の本音で、ぶつかっていくの。全て抱え込むことが、必ずしも正しい訳では無いと、私は思うから」

そう言う紗栄子の顔には、何故か、心配の色は微塵も無かった。

彼女も理解している、今のユウヒがこれ以上無いくらいに、強い状態だと。

その時、紗栄子が目を丸くして、ユウヒの指元、リングを指さした。

「ユウヒちゃん??ギアが??」

「え、あれ? 本当だ??どうして?」

ユウヒのギア、その茜色に輝いていたラインが、いつかのコウのそれと同じように、虹色に強く輝きを放っていた。

ユウヒは、それについて知らなかったが、それでも、何かを感じとったのは確かだ。

「??どうしてか分からないけど??今なら、俄然負けない気がする」

「??そうね。今のユウヒちゃんは、無敵よ。アンノウンなんて、倒してきてちょうだい」

紗栄子の頼みに、力強く頷き、ユウヒは夕日が差し込み始めた墓場を後にした。

慌ただしい彼女の後ろ姿をしばらく眺めて、紗栄子はふふと自嘲げに笑った。

「ふふ??私も、これくらい貴女にしてあげられてたら??良かったのかもしれないわね??そうでしょ? ??アオイ」

その声を聞くものは、誰もいなかった。



「??ったく、数だけやたらと多いじゃねえか」

中国に赴いていたレンカは、ダークブルーの装甲アメノハバキリを

纏い、黒い刀身の太刀を構えて、アンノウン群を見据える。

その中には、Bレートもチラホラと見受けられたが、数の多さ以外は取るに足らないこと。

その数の多さが厄介ではあるのだが。

「??さっさと終わらせちまうか。『火刃!』」

やはりと言うべきか、このアンノウン達は囷であり、本命は向こうなのだろう。インカムにも、司令部から情報が入ってきていた。

本当なら、今すぐにでも戻って、現状不安定なWayMarkを支えたいところだが、そうは行かない。こいつらを放っておけば、こっちの人間に被害が及ぶ。それだけは、国家特務機関の所属とか、世界の救済者であるとか、そういうもの以前に、彼女の性分からして嫌であった。

ならば、するべきことはひとつ。

「オレの、道を、拒むんじゃねえ!!!」

蒼炎が、大地を焦がす。

◇

アンノウンの出現で、全員がシエルターに逃げ込んだ為に、人の気配が存在しない商店街。

そこで、対面するように、栗林ミキと想語コウは対峙していた。

「??もう来たんだ」

「もう来たよ。ミキ」

眠るリオを抱えるミキに、コウは視線を鋭くする。

どうして、ミキがこのようなことをするのか、とか、リオをどうするつもりか、とか。そういつた事よりも、彼女が何らかの目的があれど、人々を殺したことに、コウは義憤していた。

それと同時に、自分出来るなら、彼女を救いたいとも。

「ミキ、どうしてこんなこ「分からないの？ 私は、コウとリオを守りたいんだ。だから、こうせざるを得なかった。それだけの事だよ？」
??ツ！」

悪びれもせずそう言うミキに、コウは歯噛みする。

その言葉に、嘘偽りは感じられなかった。

「あの時、Sレートの召喚実験で、まさかコウが重傷を負うとは思わなかったけど。でも、こうして、生きてる！ だから、私は正しいんだ！」

「??そんなわけ、あるか??！」

「あるよ。だって、私が正しくないなら、コウは死んで、私も自殺するからね。でも、そうはなってない。だから、私は正しいの」

「そんなわけ、ないだろ??！」

「なら、私を倒して止めるつもり？」

何を言っても、彼女は聞かないだろう。

だから、戦うしか、ないのか。

それこそ、そんなわけ、あるか。

「僕は、ミキとは戦わない」

「??コウらしい、ね」

「ああ。だけど、ミキを見逃すつもりもない。もつと言えば、ミキを救うつもりだ」

「??どうやって?」

「考える」

真顔でそんなことを言うコウに、ミキは苛立った。
まさか、ここまで来て、そんなことを言うとは思わなかったのだ。
衝撃以上に、こうせざるを得なかった自分と対比するようで、ミキは苛立ちを覚える。

「そうやって、人ばかり助けて、コウはどうなの!? コウが助けられたことなんて、ほとんど??」

「それは言わない約束だよ。僕は、人を救うだけで良いんだから。見返りを求めて、誰かを救えるものか」

「??ッ! ??コウ、らしいよ、そういうところ??ッ!!」

そう言つて、ミキはコウをキッと睨み付ける。

そのまま、ポケットから何らかの腕輪を取り出すと、右腕に嵌めた。

「??ミキ??」

「あの人が言うには、私にはコウとリオを助け、二人だけの為の救世主になる才能があるらしいから。これは、その為の力」

「??戦うしかないのか??」

「勿論。コウが、他を捨てて、私達と共に生きてくれるなら別だけど」

少しばかりの期待を込めて送られた誘い。

それは、コウにとつてすれば、何の解決にもならないモノ。三人で生き残る、受け取り方からすれば美德かもしれないが、そこに自らの席はいらない。

故に、大の為に最小[□]を切り捨てることの出来る彼女からすれば、そのような誘いは断る以外に選択肢がない。

「断る。僕は、ミキもリオも救つて、災いに晒される人々も救う」

「??都合の良い人だよね、本当に!!」

ミキの腕輪が赤黒く灯りを灯す。
それを見て、コウも空色の灯りを灯す指輪に手を翳した。

「——Witchcraft Nemealeon's
Start—up!」

「——Perfect Excalibur Start—up
!」

二人をほぼ同時に光が包み込む。

方や、光り輝く真製の光、方や、青く鈍く光る偽製の光。

一足先に、エクスカリバーへと変身を終えたコウが目撃したのは、赤い体毛に身を包み、胸や股、肩などに黒の装甲を施されたミキの姿。

「??この力があれば、コウだって救える!!」

「??行くよ」

コウは、黄金の剣を。ミキは、虚空より生成した棍棒のようなものを構える。

「絶対に、救ってみせる」

「私こそ、コウのこと、救ってみせるんだから??!」

幼馴染であり、友人であり、親友である二人は、こうして互いに武器を向けあった。



「??ソロモンの指輪の性能も上々。まさか、ここで使うとは思わなかったけど、ネメアの獅子の毛皮も形にはなっているみたいだね」

男は、誰も聞いていないことを把握した上で、そう呟き、目の前の

モニターを見詰めた。

そこには、対峙する二人の少女の姿が映っている。

一人は、WayMark所属の新人セイヴァーズにして、パーフェクトセイヴァーギアの纏い手である想語コウ。

そして、もう一人は男の所属する組織の尖兵として、想いの丈を誘導してやった栗林ミキ。

どちらが勝つにしろ、道具の改良点が見つかる上に、パーフェクトセイヴァーギアに勝ったのであれば、ネメアの獅子の毛皮の有用性は確実なものとなる。逆であつても、パーフェクトセイヴァーギアの唯一性と特異性、強さが際立ち、組織の面々もパーフェクトセイヴァーギアを欲するようになる。そうなれば、こちらにもチャンスは回ってくるのは確実。

『あああああ!!!』

栗林ミキの棍棒の一撃が想語コウを強打し怯ませる。

『ミイキイイ!!!』

負けじと想語コウのエクスカリバーが振るわれ、しかし、ネメアの獅子の体毛に弾かれるだけで致命打とはなりえない。

この調子であれば、勝つのはネメアの獅子なのは明白。だが、エクスカリバーがそう簡単に終わるとも思えない。

面白い。

男は、少女達の戦いを目撃し、その行く末を予想してほくそ笑んだ。